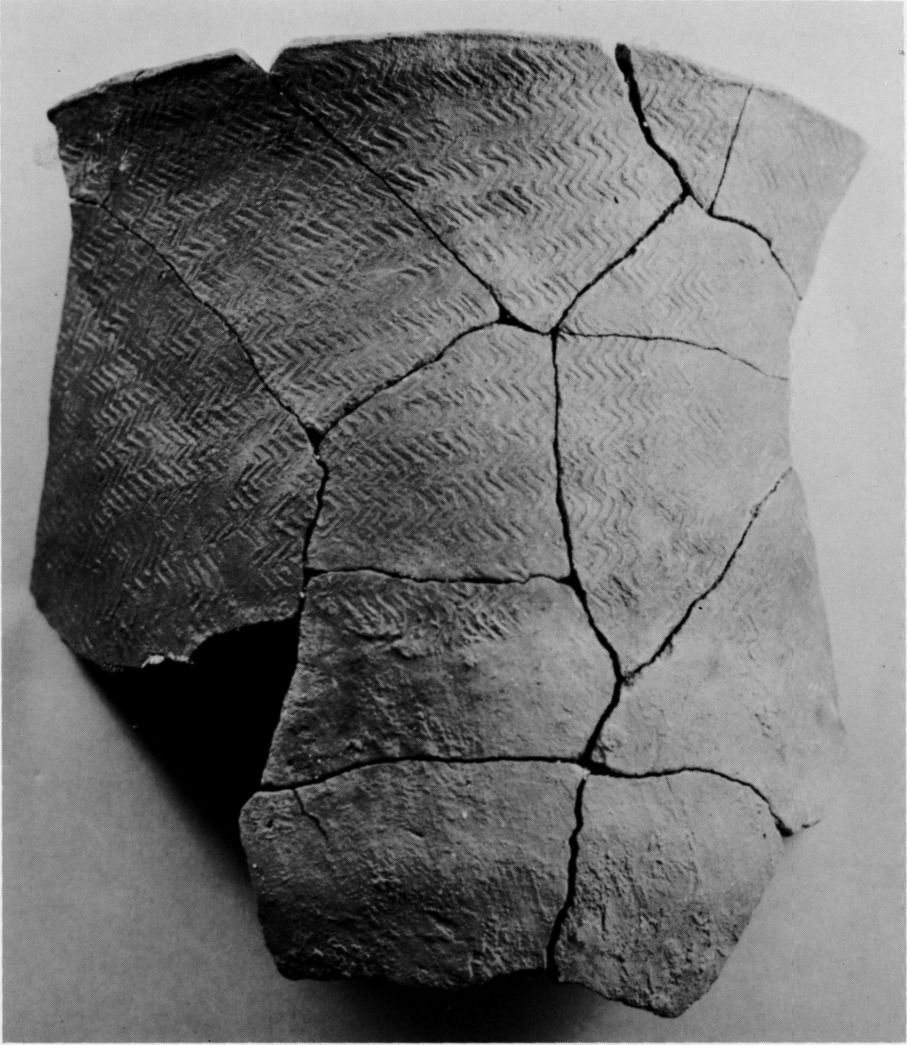


# 向畑遺跡の遺物

1983

高山市教育委員会



山形押型文深鉢土器  
(北東地点第Ⅴ層出土)

## 序

向畑遺跡は、昭和58年度に発掘調査が実施され、発掘調査報告書が刊行された。出土遺物は多量かつ複雑な組成を有していたため、今回遺物を中心として考察を加え、本書をまとめたものである。整理にあたっては大江命氏、高山考古学研究会の協力をいただき、貴重な埋蔵文化財資料として本書が完成した。これにより、飛騨地方の考古学発展に多いに役立つことはもちろん、文化財保護に大きな役割を果たすものと思われる。報告書刊行にあたり、本書作製に従事、ご協力をいただいた皆様に感謝申し上げる次第である。

昭和59年3月

高山市長 平田吉郎

# 本文目次

序

例言

第 1 章	調査の経緯	
第 1 節	発見された遺構	1
第 2 節	土器の基本的分類について	4
第 2 章	住居址等の出土遺物	
第 1 節	第 1 号住居址	7
第 2 節	第 2 号住居址	9
第 3 節	第 3 号住居址	12
第 4 節	第 4 号住居址	14
第 5 節	第 5 号住居址	16
第 6 節	第 6 号住居址	20
第 7 節	第 7 号住居址	23
第 8 節	第 8 号住居址	25
第 9 節	第 9 号住居址	28
第 10 節	第 10 号住居址	31
第 11 節	第 11 号住居址	33
第 12 節	第 12 号住居址	33
第 13 節	第 13 号住居址	36
第 14 節	土 壙 (SK)	41
第 15 節	ピット群	45
第 16 節	大ピット	48
第 17 節	近世墓	49
第 18 節	集石遺構	50
第 3 章	北東地点出土遺物	
第 1 節	第 VII 層	51
第 2 節	第 VI 層	52
第 3 節	第 V 層	53
第 4 章	出土遺物の概要と考察	63

## 挿 図 目 次

挿図 1	遺構全体平面図	1
2	第 1 号住居址の遺物 (1)	8
3	第 1 号住居址の遺物 (2)	9
4	第 2 号住居址の遺物	11
5	第 3 号住居址の遺物	13
6	第 4 号住居址の遺物 (1)	15
7	第 4 号住居址の遺物 (2)	16
8	第 5 号住居址の遺物 (1)	18
9	第 5 号住居址の遺物 (2)	19
10	第 6 号住居址の遺物 (1)	21
11	第 6 号住居址の遺物 (2)	22
12	第 7 号住居址の遺物	24
13	第 8 号住居址の遺物 (1)	26
14	第 8 号住居址の遺物 (2)	27
15	第 9 号住居址の遺物 (1)	29
16	第 9 号住居址の遺物 (2)	30
17	第 10 号住居址の遺物	32
18	第 11 号住居址の遺物	33
19	第 12 号住居址の遺物	35
20	第 13 号住居址の遺物 (1)	38
21	第 13 号住居址の遺物 (2)	39
22	第 13 号住居址の遺物 (3)	40
23	第 1 ~ 3 号土壌の遺物	42
24	第 4, 5 号土壌の遺物	44
25	第 1 ピット群の遺物	45
26	第 2 ピット群の遺物	46
27	第 3 ピット群の遺物	47
28	大ピットの遺物	48
29	近世墓の遺物	49
30	北東地点第Ⅶ層の遺物	51
31	北東地点第Ⅵ層の遺物	52
32	北東地点第Ⅴ層の遺物 (1)	55
33	北東地点第Ⅴ層の遺物 (2)	56
34	北東地点第Ⅴ層の遺物 (3)	57
35	北東地点第Ⅴ層の遺物 (4)	58
36	器形復元図	62

# 例 言

1. 本書は、昭和57年7月21日から9月20日まで発掘調査を実施した、岐阜県高山市江名子町向畑地内向畑遺跡の出土遺物の分類し考察を加えたものである。
2. 向畑地区の飼料畑、圃場整備事業により、本遺跡が破壊されるため発掘調査が実施されたものである。
3. 本編の執筆は、吉朝則富が行った。
4. 本編の挿図作成は吉朝則富、藤本健三、住寿美子が行った。
5. 調査にあたり、助言、協力を賜った大江命氏に深く感謝の意を表する。
6. 発掘調査及び遺物整理にご理解とご協力をいただいた地元土地所有者のかたがた、土地改良組合の皆様に深く感謝の意を表する。
7. 遺跡の略号は竪穴住居址をSB、土壌をSKとした。方位は磁北とした。
8. 本書に記載した遺物には、連番を付し、本文との比較に便宜を図った。
9. 調査は下記の調査団によって実施した。

団 長	高山市長	平田吉郎	調 査 員	奈良大学学生	川上富子
副 団 長	高山市教育長	長瀬正三		関西大学学生	徳田誠志
主任調査員	日本考古学協会員	大江 命	事 務 局	高山市教育委員会	
調 査 員	日本考古学協会員	石原哲弥		事 務 局 長	中屋政二
	岐阜県考古学会員	寺地茂雄		社会教育課長	増井淑郎
	岐阜県考古学会員	藤本健三		文化財係長	小林 浩
	岐阜県考古学会員	野村宗作		文化財主任	田中 彰
	岐阜県考古学会員	吉朝則富			
	高山考古学研究会	会 員			

なお、土器形式の判定にあたっては整理の進展に伴い、発掘調査報告書での記述と本書においては若干の相違を生じた点をここに明記し訂正する次第である。

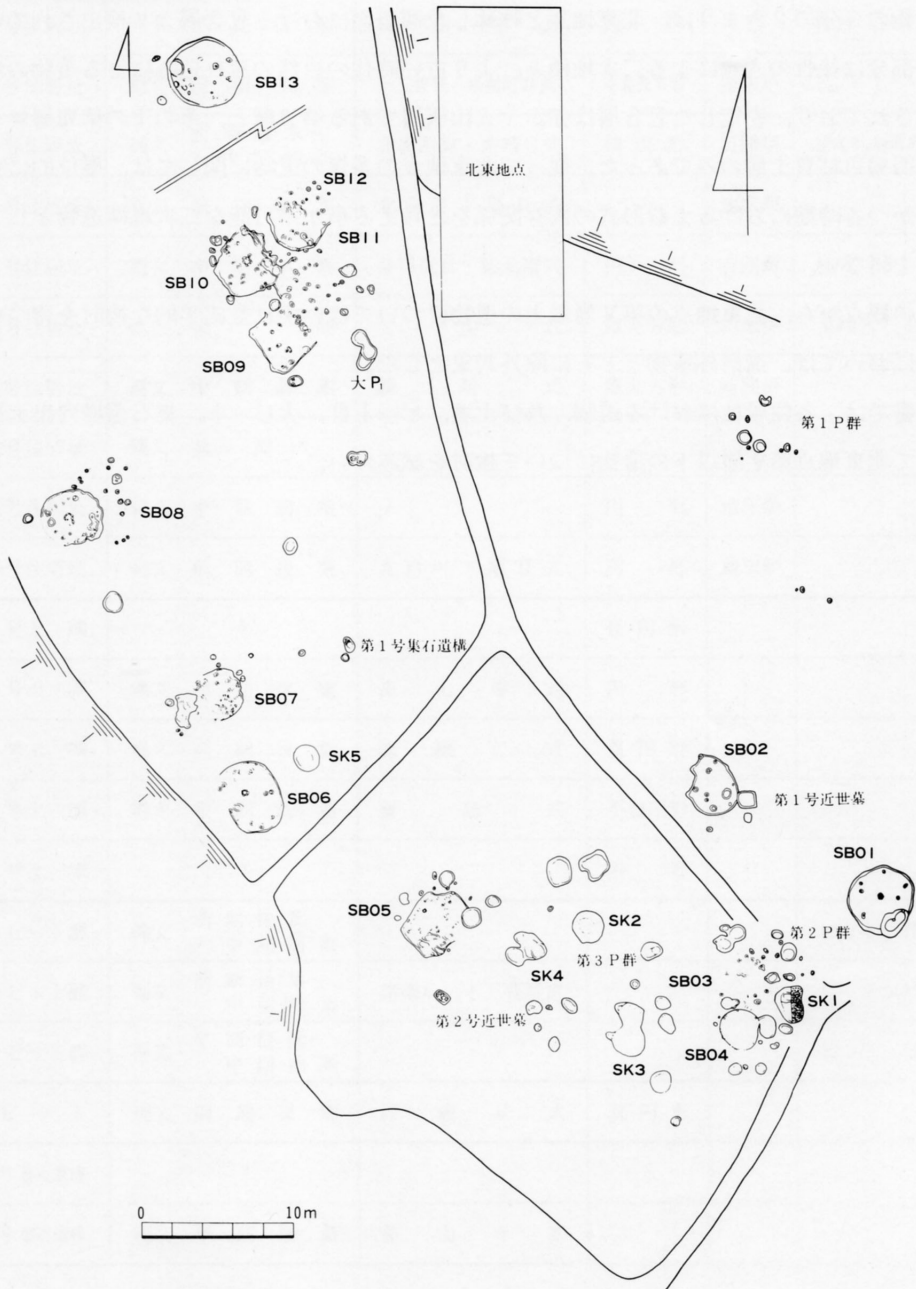
## ○ 正 誤 表

P25	11行目	曾利I・II・III式	——→	井戸尻II式
P32	最下行	(P <sub>13</sub> )「土器片1点出土」	——→	削除
		補足：P <sub>12</sub> は10cmの小ピットで土器片1点が出土した。		
P34	6行目	P <sub>2</sub> ・P <sub>6</sub> からは	——→	P <sub>6</sub> からは
P35	表1	(P <sub>2</sub> )爪形浮隆線・縄文	——→	削除
P48	表2	石鏃	SB 6	26 ——→ 29
			北東地点	117 ——→ 112
			他グリッド	112 ——→ 110

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 発見された遺構

挿図1 遺構全体平面図



昭和57年7月21日から2箇月間を費やして実施された向畑遺跡の発掘調査は、結果として住居址13基、土壇5基、ピット群3箇所、集石遺構1箇所、近世墓壇2基を検出し、遺物として土器片約6500点、石器類2800点、その他人骨、自然遺物等も検出して終了した。

発掘調査の経緯、遺跡の環境及び出土遺構の検討については、既に58年3月に向畑遺跡発掘調査報告を刊行した。遺物は多量かつ複雑な組成を有するため、その整理には慎重さと精密さが要求され、全容を明らかにするためには、なお多くの時間を要した。

遺物の3分の2あまりは、北東地点と呼称した傾斜面における包含層より検出されている。この部分は後世の人為による二次堆積と、より古い時代の自然の流れ込みによる遺物の堆積が想定されており、安定した包含層は赤ホヤ火山灰層である第Ⅵ層と、その下の第Ⅶ層ローム粒混入明褐色粘質土層のみであった。従って北東地点の多量の遺物に関しては、層位的にも混在し、かつ各時期における土器形式の共存関係をとらえる事が不可能な二次堆積遺物として扱わざるを得ない。

この観点から、北東地点の第Ⅴ層以上の遺物についてはいずれ型式学的な検討を待つ事とし、本書においては、遺構外遺物とともに除外対象とした。

本書では、各住居址における遺物、及び土壇、ピット群、大ピット、集石遺構内出土遺物、そして北東地点第Ⅴ層以下の遺物について検討を試みたい。



第1表 発見された遺構一覧表

	時 期	該当土器型式	住居址平面形	炉 址	備 考
第1号住居址	縄文 中期 前葉～ 中葉	船元・井戸尻式	円 形	石囲炉	柱穴 6 ?
第2号住居址	縄文 前期 末葉	里 木 I 式	楕円形	?	柱穴 7 ?
第3号住居址	縄文 前期末葉 中期前葉 重複?		?	地床炉	
第4号住居址	縄文 早期 後葉	高 山 寺 式	円 形	?	柱穴 14 ?
第5号住居址	縄文 前期 末葉	十三菩提・鍋屋町Ⅱ式	隈丸長方形	地床炉	?
第6号住居址	縄文 前期 最末～ 中期 初頭	北裏四群・諸磯C式	楕円形	石囲炉	柱穴8,周溝あり
第7号住居址	縄文 前期 後葉	北白川下層Ⅱ式	?	地床炉	
第8号住居址	縄文 中 期 中 葉	井戸尻Ⅱ・船元Ⅲ式	円 形	石囲炉	柱穴 6 ?
第9号住居址	弥生 後 期	欠 山 式	隈丸方形	地床炉	主柱穴 4
第10号住居址	縄文 中 期 前 葉	新 崎 式	隈丸方形	石囲炉	
第11号住居址	縄文 前 期 ?		?	?	
第12号住居址	縄文 中 期 前 葉		円 形	地床炉	
第13号住居址	縄文 前 期 後 葉	北白川下層Ⅱ式	円 形	地床炉	
第1号土 壙	?		長円形		
第2号土 壙	縄文 早期 後葉	高 山 寺 式	円 形		
第3号土 壙	縄文 前期 後葉	諸 磯 C 式	双円形		
第4号土 壙	縄文 中期 前葉	鷹 島 式	不整円形		
第5号土 壙	?		円 形		
第1ピット群	縄文 前期 後葉～ 中期 前葉				ピット 10
第2ピット群	縄文 前期 後葉～ 中期 前葉	諸磯C・十三菩提式			ピット14以上
第3ピット群	縄文 早期 後葉～ 中期 前葉				ピット 14
大ピット	縄文 前期 後葉	諸 磯 b 式	双円形		
第1号集石遺構	?				
第2号集石遺構	縄文 早期 後葉	高 山 寺 式			

## 第 2 節 土器の基本的分類について

第 2 表 縄文土器分類表

群	類	土 器 の 文 様 ・ 形 態				備 考	
第 1 群 土 器 (縄文早期の土器)	1 類	押 型 文 土 器	A	山 形 文	a	通 常	
					b	粗 大	
			B	楕 円 文	a	粒の細かいもの	
					b	粒の粗いもの	高 山 寺
			C	菱 形 文		高 山 寺	
			D	複 合 文			
			E	凸 帯 付		相 木	
	F	ネ ガ テ ィ ヲ					
	2 類	撚糸文土器	A	撚 糸 文			
			B	網目状撚糸圧痕文			
	3 類	条痕文土器	A	厚手の条痕文	八 ッ 崎		
			B	薄手の条痕文	木 島		
	4 類	沈線文土器	A	沈 線 文	田 戸		
			B	貝 殻 沈 線 文			
5 類		縄 文 土 器				茅 山	
6 類		刺 突 文 土 器				柏 畑	
7 類		無 文 ・ 底 部 ・ そ の 他					
第 2 群 土 器 (縄文前期の土器)	1 類		条痕調整のある土器			北白川下層 I・II 式	
	2 類	爪形文を施文する土器	A	連続爪形文(シュロ状)		" II a	
			B	単 独 爪 形 文		" II a	
			C	側 線 入 爪 形 文		" II b (諸磯 b)	
	3 類	突 帯 を 有 す る 土 器	A	突 帯 上 に 刻 目		" II c	
			B	突 帯 上 に 爪 形		" II c	
			C	突 帯 上 無 文		" II c	
			D	突 帯 上 縄 文		" II c、北裏四群	
	4 類	沈 線 文	A	半 截 竹 管 沈 線			
			B	へ ら 描 沈 線			
	5 類	縄 文 を 施 文 す る 土 器	A	関 西 系 縄 文		北白川系	
B			関 東 系 縄 文		諸 磯 系		
C			中 間 形 縄 文				
6 類		爪 形 文 帯 区 画 磨 消 縄 文				諸磯 a・b、北白川下層 II	
7 類		無 文 土 器					
8 類		丹 彩 土 器					
9 類		列 孔 浅 鉢 土 器				諸磯 a・b	
10 類		ソ ー メ ン 状 貼 付 文				十三菩提・鍋屋町 II	
11 類		底 部 ・ そ の 他 の 土 器					
第 3 群 土 器 (縄文中期の土器)						北陸系・信州系・関東系・瀬戸内系	

今回の調査により出土した遺物は、縄文時代に属するものが大半を占め、弥生時代のものが少量ある。また、須恵器1片と近世の墓壇に伴う古銭等がある。

本分類は、縄文時代の土器について、遺構内覆土層より出土したものを対象に行ったものである。しかし、包含層の攪乱により数期の土器の混在が激しく、各時期における土器の共伴関係を知りうる遺構は乏しかった。比較的13号住居址が、やや離れた部分に単独で存在し、その組成が期待されよう。

土器の分類は、第1群に縄文早期の土器、第2群に縄文前期の土器、第3群に縄文中期の土器をそれぞれ分けた。

次に、その文様形態から細分して類に分け、必要に応じて更にA・B・Cと分けたが、特に2群の前期土器に関しては、東西両文化の交錯による文様要素の微妙さがあり、比較的細かく類別した。2群2・3・4類における東西両系統の土器については、それぞれ本文中において示した。5類の縄文の施文された土器に関しては、器厚・焼成・胎土・色調で判別されるものであるが、それらを一応念頭においた上で、基本的には厚さを主軸に3種類に分類し、別表において色調での分類を試みた。

底部としての類別は適当ではないと思われるが、本体の文様の判別できない底部が多い事と、個体数を知る上の一つの材料となる点を考えて類別した。

中期土器の分類は、該当の住居址についてそれぞれ行った。量的には北東地点に最も多く、機会を待って検討・再編成したいと考える。

備考欄においては対比される型式名を記したが、代表的なもののみを示したにとどまる。  
(註)  
 なお、北白川下層式については、鳥浜貝塚報告書の分類を参考とした。

(註) 鳥浜貝塚 福井県教育委員会 1979

第3表 縄文施文土器の厚さ・色調による分類表

SB 05

色 調	厚 さ mm										計
	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
赤 褐 色		1	3	5	3	1					13
明褐色・黄褐色・褐色	3	14	36	47	24	10					134
灰白色・灰褐色・青灰色		3	10	12	8	1	3				37
黒褐色・暗褐色・黒色		8	6	7	10	3					34
計	3	26	55	71	45	15	3	0	0		218

## SB 06

色調 \ 厚さmm	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
赤褐色				1	1	1	1		1	5
明褐色・黄褐色・褐色	5	13	23	18	25	24	7	8		123
灰白色・灰褐色・青灰色	1	6	4	3	1	3				18
黒褐色・暗褐色・黒色	1	4	7			1				13
計	7	23	34	22	27	29	8	8	1	159

## SB 07

色調 \ 厚さmm	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
赤褐色		3	3	2	4	3	1		1	17
明褐色・黄褐色・褐色	3	10	13	12	5	3				46
灰白色・灰褐色・青灰色	2	2	5	3	2		1			15
黒褐色・暗褐色・黒色	2	2	7	3						14
計	7	17	28	20	11	6	2	0	1	92

## SB 13

色調 \ 厚さmm	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
赤褐色	2	2	4	8	5	3				24
明褐色・黄褐色・褐色	40	56	35	23	21	12	2			189
灰白色・灰褐色・青灰色		4	13	19	6					42
黒褐色・暗褐色・黒色	12	33	4	8	1					58
計	54	95	56	58	33	15	2	0	0	313

(第3表 縄文施文土器の厚さ・色調による分類表の解説)

縄文前期に所属する3つの住居址から出土した、縄文の施文される土器片に関して、厚さ及び土器表面の色調での分類を行った。但し時期の異なる遺物を混入しており、例えば青灰色・厚手ものは北陸系中期初頭、黄褐色・厚手ものは中期船元系土器に含まれる可能性が高い。

概観では、明褐色・黄褐色・褐色を呈する土器が最も多く、そのうち5～8mmのものは全数量の48%を占めている。赤褐色に近い厚手ものは諸磯系に、黒褐色・暗褐色・黒色で4～5mmのものは北白川系土器に対比することができよう。

## 第2章 住居址等の出土遺物

### 第1節 第1号住居址

小形の石囲炉を伴う円形プランの住居址である。覆土中に少量の早期・前期土器が混入しているが、中期前半から中葉の諸形式の土器が主体となっている。

#### 1. 1群の土器（早期）

1は1群1類Cに分類される菱形回転押型文土器である。赤褐色・厚さ10mm・白い砂粒を含み、焼成普通。20mm大の菱形文が浅く施文される。これ1点のみで、SBO4の関連遺物であろう。2は、6類の刺突文に分類される繊維入土器で、粕畑式に対比される。灰褐色・厚さ8mm焼成普通。同じく3は尖底の端部を圧したような小さな平底をもつ深鉢で尖底部径は23mmである。

#### 2. 2群の土器（前期）

4は、2群2類Cに分類される側線入連続爪形文土器で、口縁に小突起がつく。暗褐色・厚さ6mm、焼成堅緻、1点のみ。

#### 3. 3群の土器（中期）

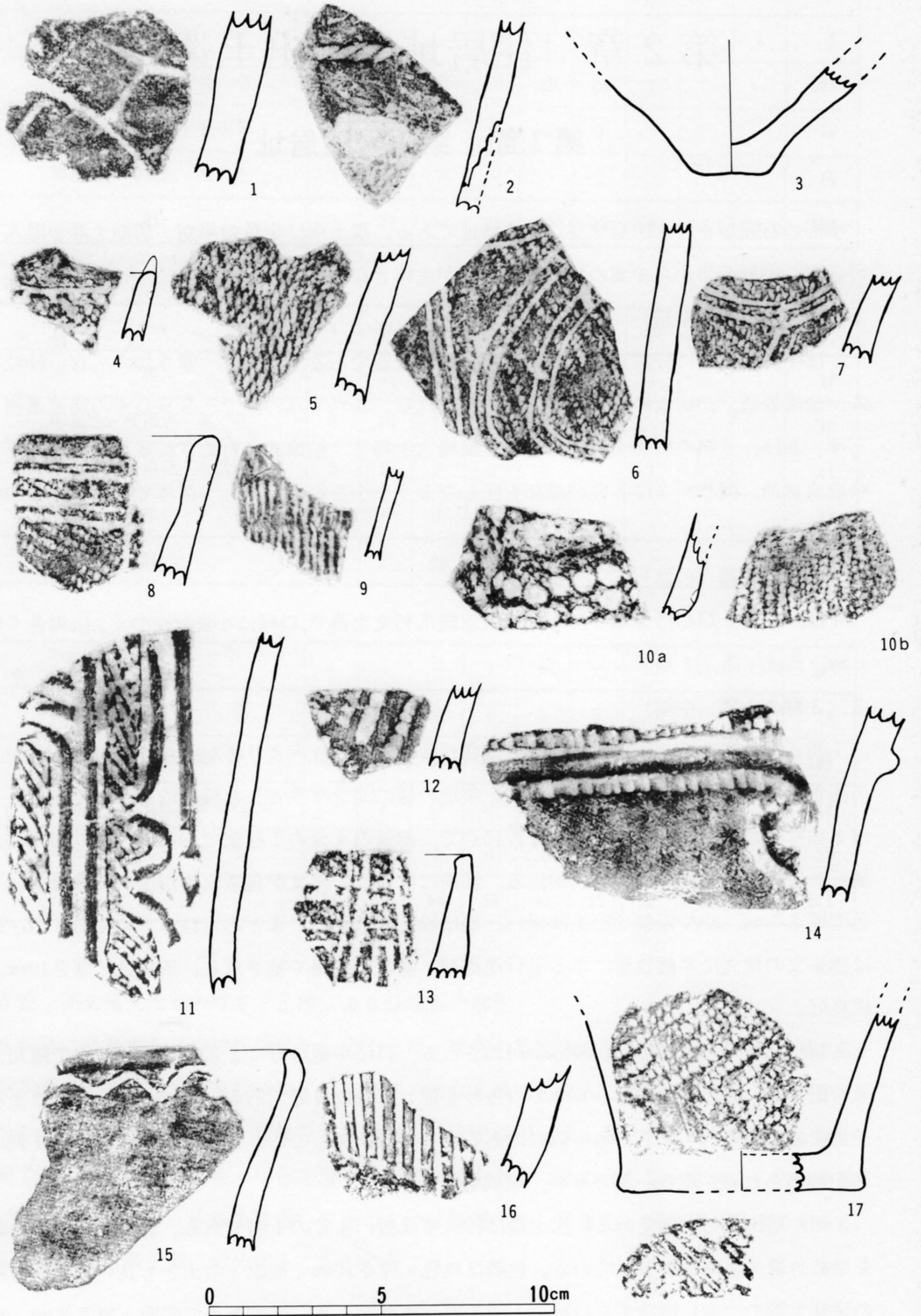
〈1類〉鷹島式土器。大形爪形文の施されるもので、P<sub>3</sub>内より僅か1点の出土である(9)。黒褐色・厚さ5mm。裏面は凹凸があり、梨地の様にザラザラとした特徴的な胎土である。

〈2類〉船元式土器に属する土器は計15点で、総量の4分の1程度である。10のみ船元II式に属し、貝殻の頂部による圧痕列が巡る。裏面には横位の縄文が施されるが段の形式はない。褐色で厚さ5mm、やや粗製で胎土は粗い。他は船元III式としてまとめられるものであり、6・7・8は撚糸文の地文に半截竹管による平行沈線が、直線、曲線で施される。灰褐色・厚さ10mm、焼成良好。

〈3類〉北陸系の土器で、新崎式に対比される。11は半截竹管による深い平行沈線で隆起文効果を出している。褐色・厚さ6mm・白色砂を混じえ焼成良好である。13はへら状工具による格子目文で、明褐色・厚さ9mm・軟質である。5の撚糸文もここに含まれよう。20mm巾9列の原体が観察される。橙色・厚さ9mm、焼成普通。

〈4類〉信州系の土器である。出土量は12点で総数の4分の1弱である。14は、隆起線の両側を半截竹管の腹部で押引している。色調は褐色・厚さ10mmで焼成・胎土とも良い。15は赤褐色の深鉢土器で、少し内湾する口縁に1条の波状沈線が巡る。焼成極めて堅緻・厚さ5mm。16は

挿図2 第1号住居址の遺物 (1)



ヘラ描沈線文である。

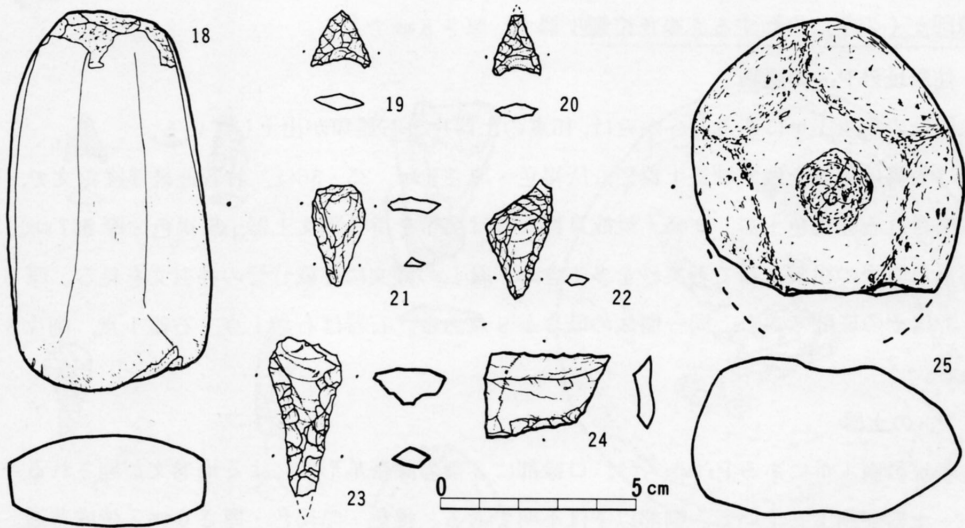
〈5類〉縄文のみの土器を一括した。2個体の大破片及び小破片26点がある。細分は困難であるが、口唇の肥厚するものは関西系の土器によく見られる。挿図36-①は、口縁部が肥厚する全面縄文の深鉢土器で、推定口径38cm。明褐色・厚さ9mmで焼成は弱い。挿図36-②は口縁が直上する全面縄文の深鉢土器で、口縁部での厚さ5mm、下部で12mm。明褐色、石英砂を多く含み焼成は普通、推定口径22cmである。

〈6類〉その他無文の小土器片が約30点ある。明褐色・赤褐色・黒褐色と様々であり、厚さも5mmから11mmまでである。2類・3類・4類のいずれかに属するのであろうが明確に区分できない。底部資料は4点で、17は網代痕がみられる。

#### 4. 石 器

住居址内出土の石器には次の様なものがある。磨製石斧1点(18)は白色蛇紋岩製定角石斧で刃部は外湾し、頭部は打撃のため潰れている。石鏃3点(19・20 別表参照)。石錐3点(21・22・23)はいずれもつまみ付である。スリ石は砂岩製1点。凹石は流紋岩製で1点(25)。削器3点で24はチャート製。剥片7点。石核1点。

挿図3 第1号住居址の遺物 (2)



### 第2節 第2号住居址

ほぼ楕円形のプランを有する住居址で、炉の検出はなかった。近世の土壌に一部を切られて

いる。遺物は、早期から中期初頭までのものを見るが、前期末の土器が住居址に該当する様である。

### 1. 1群の土器

26は、1類Baに分類される、 $2 \times 4$  mmの細かい楕円押型文である。褐色・厚さ8 mmで焼成良好、胎土も良い。1点のみ。他に無文の織入土器（7類）が3点ある。灰褐色で厚さ8 mm。

### 2. 2群の土器

本住居址の時期に関連する土器群で、前期末葉の形式を主要とする。

27は、連続爪形に羽状縄文の施される、2類Cの土器である。28は、突帯上に爪形が入る（3類B）。29は、半截竹管による沈線文が施される（4類A）。5類の縄文施文土器は、5 mm 2点、6 mm 4点、8 mm 2点である。

30は、ソーメン状の貼付帯を竹管で押しつけたもので、厚さ4 mm、暗褐色で堅い（10類）。31は、二枚貝の貝殻背面押捺のある土器で、九合洞窟遺跡第5群C類（註）に対比される里木式土器である。厚さ4 mm・暗褐色・焼成やや悪い。7類無文土器は18点あり、薄手3点の褐色のもの以外は、様々で一定しない。

### 3. 3群の土器

32は、木目状撚糸文土器で1点のみ。明褐色で厚さ6 mm、胎土・焼成とも良好。33は半截竹管による隆起線文。暗褐色で厚さ9 mm。S B O 1に同類（同一個体？）を見る。無文土器は、口頸部がくの字に内傾する赤褐色粗製土器で、厚さ8 mmである。

### 4. 住居址外 P<sub>10</sub> の遺物

住居址の南東1 mにあるP<sub>10</sub>からは、15点の土器片と石器類が出土している。

34は表裏に条痕を残す硬質土器で、灰褐色・厚さ5 mm。35・36は、竹管連続浮隆線文で、縄文も施される赤褐色土器。9 mm・焼成良好。37は突帯を持つ縄文土器。黒褐色・厚さ7 mm。38は明褐色厚手の粗製土器で石英砂を多く含み、RLの縄文に半截竹管の押引文を見る。厚さ10 mm。39はその底部である。同一個体の破片が9点ある。石器は石鏃1点、石錐1点、削片3点である。

### 5. P<sub>11</sub>の土器

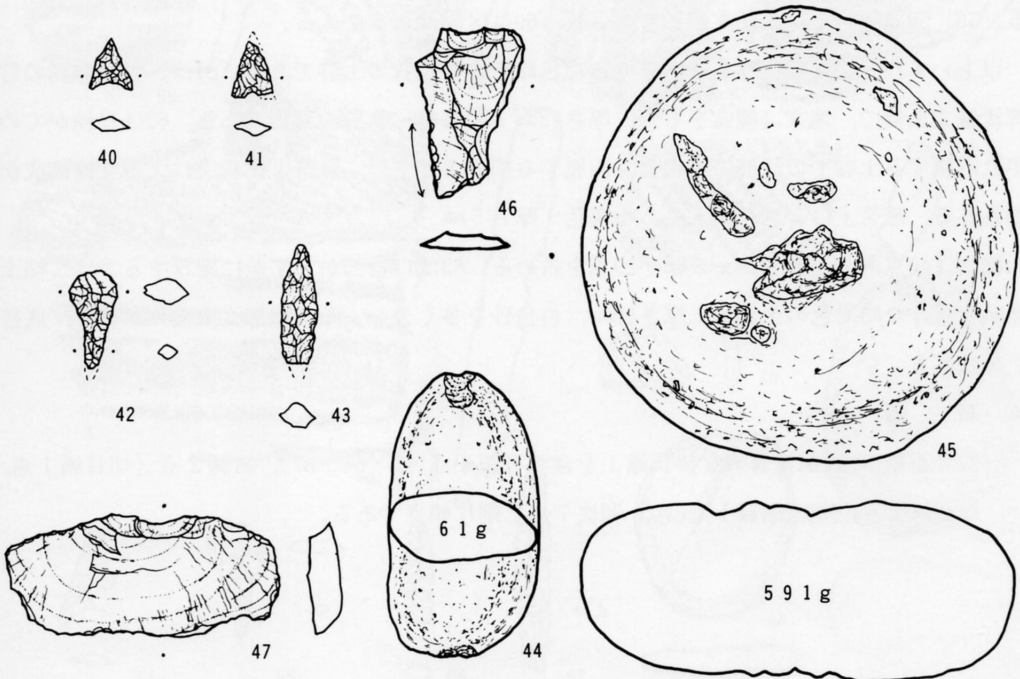
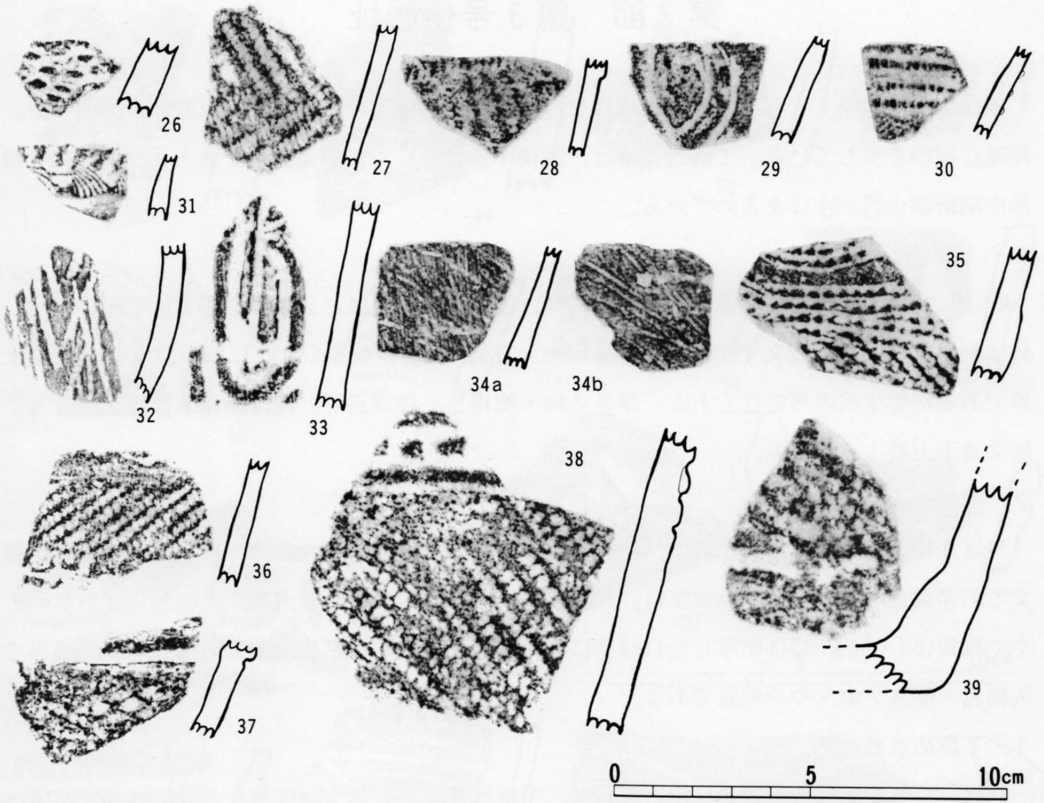
住居址の南1 mにあるP<sub>11</sub>からは、口縁部に3条の隆帯爪形文による渦巻文が施されるキャリパー土器が出土している。胴部以下は不明である。褐色・暗褐色・厚さ6 mm・焼成普通。北陸系中期前半土器であろう。（挿図36-③）

### 6. 石 器（住居址内）

石鏃2点（40・41）。石錐2点（42・43）。石錘1点（安山岩礫石錘44）。凹石1点（安山岩45）。削器2点（46・47）。剥片4点。削片10点。 （註） 九合洞窟遺跡 澄田・大参 名大文学部 S 31



挿図4 第2号住居址の遺物



### 第3節 第3号住居址

本住居址は、第2ピット群と一部重複し、また2基の住居址が存在した可能性もあるため、複雑な様相を呈している。1群の土器は、隣接するSBO4の関連遺物であろう。3群の北陸系中期前葉土器が主体を占めている。

#### 1. 1群の土器

48は、20mm大の菱形文で赤褐色・厚さ10mm、僅かに繊維を混じえ焼成普通である(1類C)。49は網目状の撚糸圧痕文で赤褐色・厚さ10mm・石英、長石砂を多く含む(2類B)。50は条痕文土器であるが弥生式の可能性もある。厚さ7mm・明褐色・焼成良好。他に繊維入土器2点、及び無文薄手土器1点がある。

#### 2. 2群の土器

51は3類Dの突帯上縄文土器で、赤褐色・厚さ8mm・焼成堅緻。52は4類Aの半截竹管沈線文で、赤褐色・厚さ9mm・焼成堅緻。10類のソーメン状貼付文は3点あり、褐色・厚さ7mm・やや軟質(53・54)。55は肥厚した口縁部に三角形の印刻文が施される十三菩提式類似の土器で灰褐色・厚さ7mm・やや軟質である。

#### 3. 3群の土器

56は、口唇が肥厚する波状口縁の土器で、半截竹管沈線と縄文が施される。57は刺突が加わる。58、59は隆帯上に竹管文が密に施され、60は区画沈線文が入る。

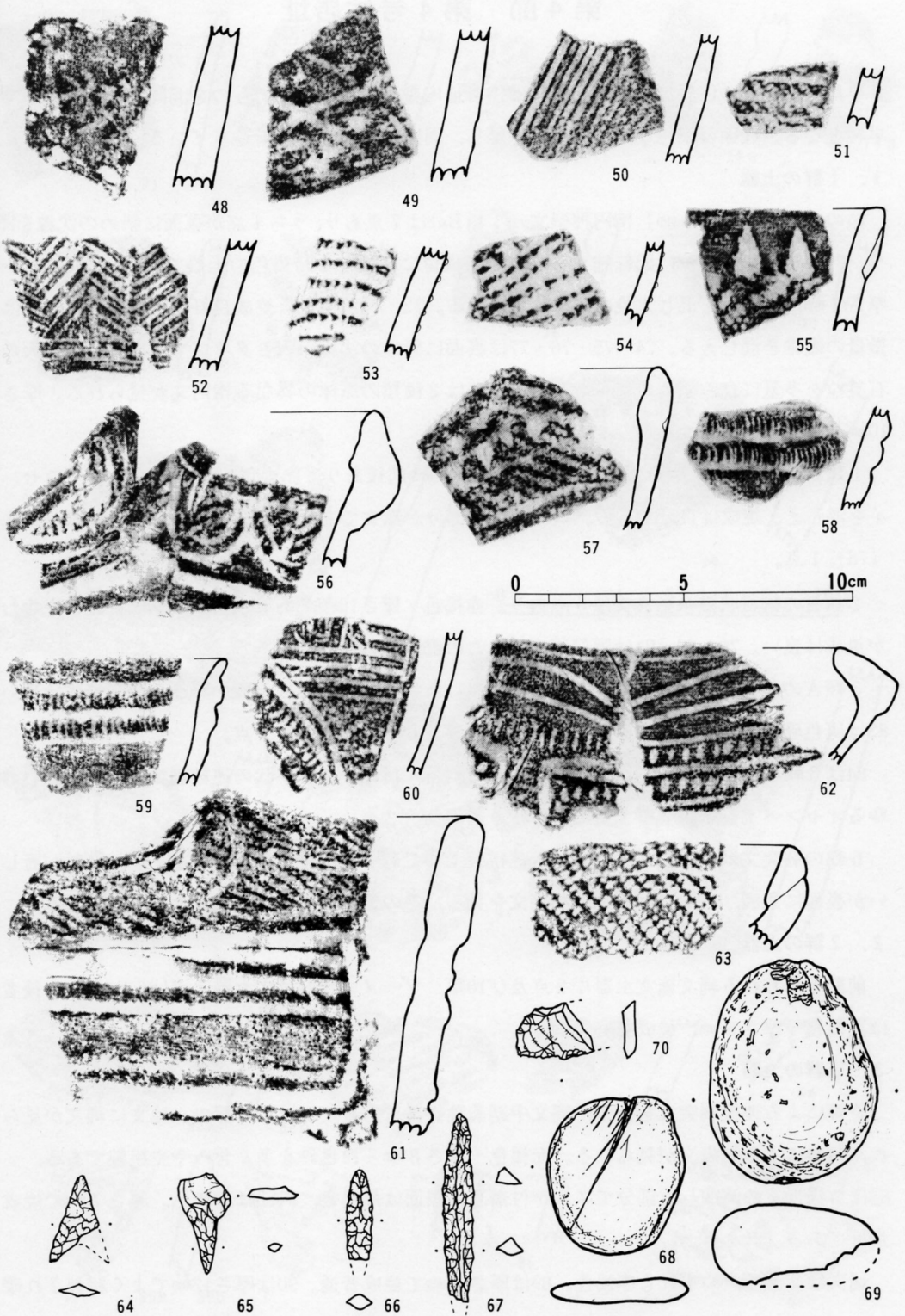
以上いずれも暗褐色・厚さ6～7mmの白色砂を含む粗質の土器である。61は、波状口縁の竹管沈線文土器で、地文に縄文をもち、厚さ12mm・明褐色・軟質の土器である。62は口縁がくの字に内屈する土器で口縁部に沈線文、内屈する部分より下部に隆帯と沈線文による文様構成がなされる。隆帯上にも刻目が入る。明褐色・厚さ5mm。

縄文は46点あり、厚さ7～8mmが29点を占める。63は口唇部がわずかに肥厚するように粘土を貼り付けた暗褐色の土器で、厚さ10mm、白色砂を多く含む。その他無文土器片が41点、底部が3点ある。

#### 4. 石器

石器は石鏃1点(64)。長大な棒状錐1を含む石錐4点(65・66・67)。石錘2点(切目錘1点、68。礫石錘1点、69)。削器1点(70)。剥片7点。削片40点である。

挿図5 第3号住居址の遺物



## 第4節 第4号住居址

早期押型文期の住居址であり、遺物は住居址内覆土上部で中期のものを混同するが、下層で単純となる。底面の平坦なスリバチ形を呈し、周囲に柱穴が14ヶ所巡っている。

### 1. 1群の土器

粒の細かい(4~5mm)楕円押型文(1類Ba)は7点あり、うち4点が裏面に斜めの沈線を伴う。71は口縁部に横位に回転施文し、以下は縦位に施文する暗褐色の土器で、鉢形に開く。厚さ7mm、白色砂を混じえ焼成やや軟質である。72、73は褐色、焼成良好、厚さ7mmで、73は微量の繊維を混じえる。74・75・76・77は裏面に斜めの沈線が入るタイプで、白色の5mm大の石英粒を多量に含み極めて粗質である。75には2種類の原体の異なる楕円文が見られる。厚さ10mm、外反する器形である。

1類Bbに分類した大粒の楕円文は、粒の径が10mm前後あり、赤褐色、厚さ12mm、若干のセイを混じえ、焼成は良好である。口縁に近い部分が無文であり、裏面には斜行する沈線が入る(78)。1点。

2類Bの網目状捺糸圧痕文は5点あり、赤褐色・厚さ12mmである。5~7mm大の砂粒を含むが焼成は良い。79・80・81は胴部破片で、この部分での径は30cmある。

3類Aの条痕文土器として、82は表裏に粗い条痕の入る繊維入土器。厚さ8mm・焼成は良い。83は灰色硬質の土器で、表面に条痕があり、厚さ6mmである。計3点。

84は3mmの薄手土器で指痕を残し、口唇に刻目、口縁下にD字状の連続刺突文を持つ。いわゆるオセンベ土器系の薄手土器であろう。黄褐色。2点。

6類の刺突文は85の1点である。灰色粗製土器で若干の繊維を含み、厚さ7mm、磨耗が著しいが裏面に条痕、表面には斜位の刺突文を見る。その他に、繊維入の無文土器が1点ある。

### 2. 2群の土器

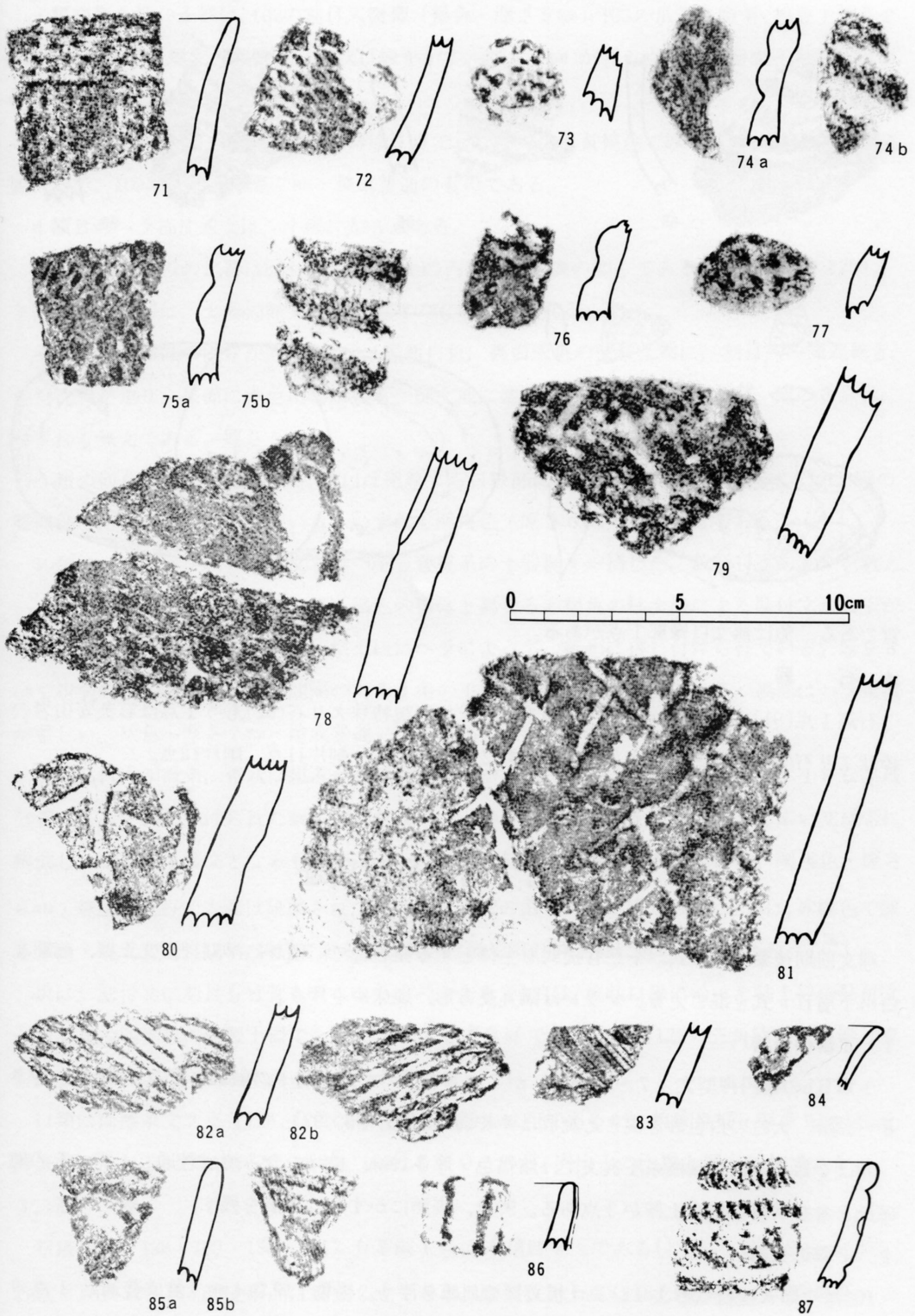
前期と思われる縄文施文土器片2点及び10類、ソーメン状貼付文土器1点(86)がある。後者は黄褐色・厚さ6mm、焼成良好である。

### 3. 3群の土器

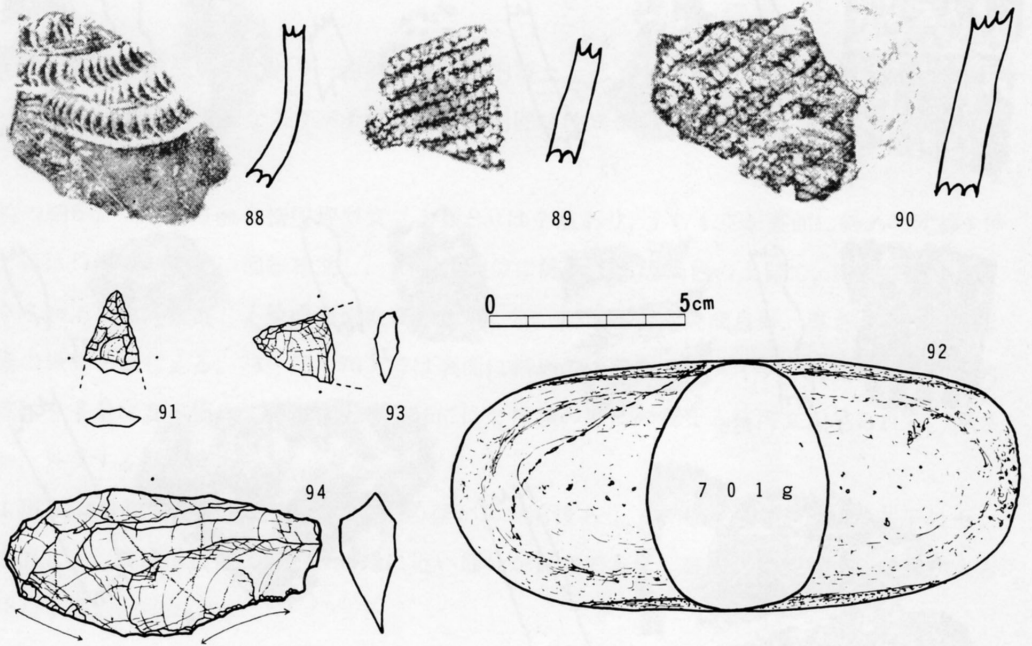
竹管による連続刺突文を持つ、縄文中期前葉土器である。87は口縁部で、地文に縄文が見られ、刺突による鋸歯文が見られる。赤褐色・厚さ8mm・白色砂を多く含みやや粗製である。88は口縁近くの湾曲した部分でススが附着し、表面は黒褐色、内部は赤褐色。厚さ7mmで焼成良好である。計2点。

縄文は2点で、いずれも赤褐色。89は厚さ8mmで焼成普通。90は厚さ12mmでよく精製され硬

挿図6 第4号住居址の遺物 (1)



挿図7 第4号住居址の遺物 (2)



質である。他に無文口縁部1点がある。

#### 4. 石器

石鏃1点(91)。スリ石2点。スリ石の1点は流紋岩製特殊スリ石(92),もう1点は石英安山岩の棒状スリ石である。凹石1点(砂岩)。削器2点(93・94)。剥片11点。削片12点。

## 第5節 第5号住居址

縄文前期後葉の諸磯式, 十三菩提式を主体とする住居址で, 僅かに早期押型文土器, 前期北白川下層II a 式を混じえる。プランは隅丸長方形, 地床炉を伴う。

### 1. 1群の土器

1類Bbの楕円押型文(7~8mm大)が3点ある。いずれも若干の繊維を含み, 明褐色・厚さ8~13mm, 大粒の白色砂を混じえ焼成はやや弱い(95・96・97)。

98は2類Bの網目状撚糸圧痕文で, 暗褐色・厚さ10mm, 繊維を含み焼成普通。1点。その他繊維を含む明褐色無文土器が3点ある。99は, 表面にかすかに条痕を残す。

### 2. 2群の土器

100は2類A連続爪形文(シュロ状文)で刻線を伴う。褐色・厚さ4mm・焼成普通。1点の

み。101はC字形爪形文で暗褐色、厚さ5mm、胎土は精製されて焼成良好である。(2類C)。1点。

3類突帯を持つ土器は、102の刻目入突帯(褐色・厚さ5mm)、103の爪形入突帯(褐色・厚さ6mm)、104の突帯上縄文(赤褐色、波状口縁を示す。厚さ6mm)が各1点ずつ、断面三角の貼付突帯土器が4点見られる(105・106)。

4類Aの半截竹管による沈線文土器は9点で、107、108は黄褐色で厚さ5mm・焼成良好な精製土器で、109は灰色・厚さ7mm・焼成普通のものである。

4類Bのへら描沈線文は、小破片が8点ある。

5類の縄文のみの土器は218点を数え、その内容は第3表の如くである(123・124・125)。

7類の無文土器は、土器の無文部など種々のものが含まれる。

8類丹彩土器は5破片があり、110は表面白色、裏面灰色の精製土器に、刻目入の隆起線と、押引沈線が走り、表面に赤色塗料が残る。縄文地に塗彩されるものが1点ある。他の3点は、いずれも無文である。厚さ5mm。

9類の列孔浅鉢土器は2点で、111は肥厚する口縁部に、径4mmの貫通孔がある。112は胴の屈曲部で、表面は研磨されている。いずれも明褐色・厚さ6mm・焼成良好である。

10類は、ソーメン状の貼付文を持つ十三菩提系の土器群を一括した。数量44点あまりを数え、いずれも地文は無文である。113は、褐色の器体と異なる赤褐色の粘土紐による貼付文が右下がりに数条並び、口唇部にも及ぶ。粘土紐はへらによって、斜めに押し付けられている。厚さ8mmで粗製軟質である。114は、間隔のある4条の平行貼付文の下は縄文となり、裏面はへら条痕が著しい。灰色・厚さ7mm・焼成普通。115、116も同類である。

次に貼付文が数条、帯状に組み合わせられたものがある。117・118は同一個体で、小さな半截竹管によって押しつけられた数列の貼付帯が、渦巻や三角の文様を口縁部下の中広い文様帯に構成し、胴部下は縄文となるものである。口唇には無施文の粘土紐が飾られる。明褐色・厚さ9mm・焼成は良好で表面は研磨され、部分的に滑沢のある黒い皮膜が残る。119は、赤褐色で厚さ8mm・焼成普通。120も同様である。これらは鍋屋町II群土器に近いものであろう。(註)

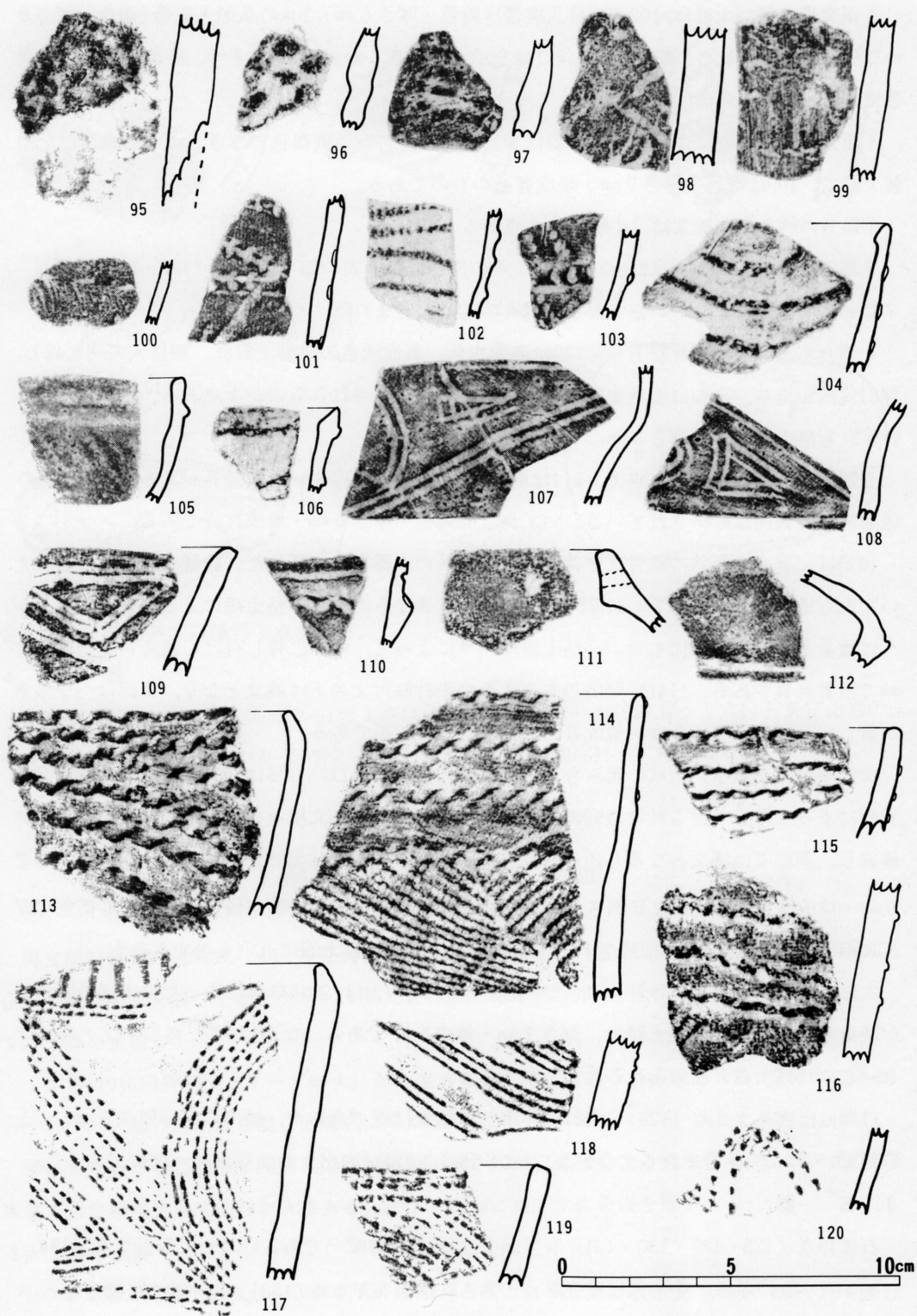
次に、貼付文に刻目も竹管も入らないものがある。121は、波状口縁に沿った粘土紐の貼付文が数条並び、明褐色の粗製土器で、厚さ7mm・焼成良好である。なお122の三角陰刻文土器1点も、この10類土器に組み入れられるものである。

11類には撚糸文2点(126、白色砂粒を混じえ胎土は粗であるが、焼成良好・厚さ9mm)と、土器底部15点(127)が含まれる。なお、127はSBO3のP<sub>4</sub>内出土の土器と同一個体である。

### 3. 石 器

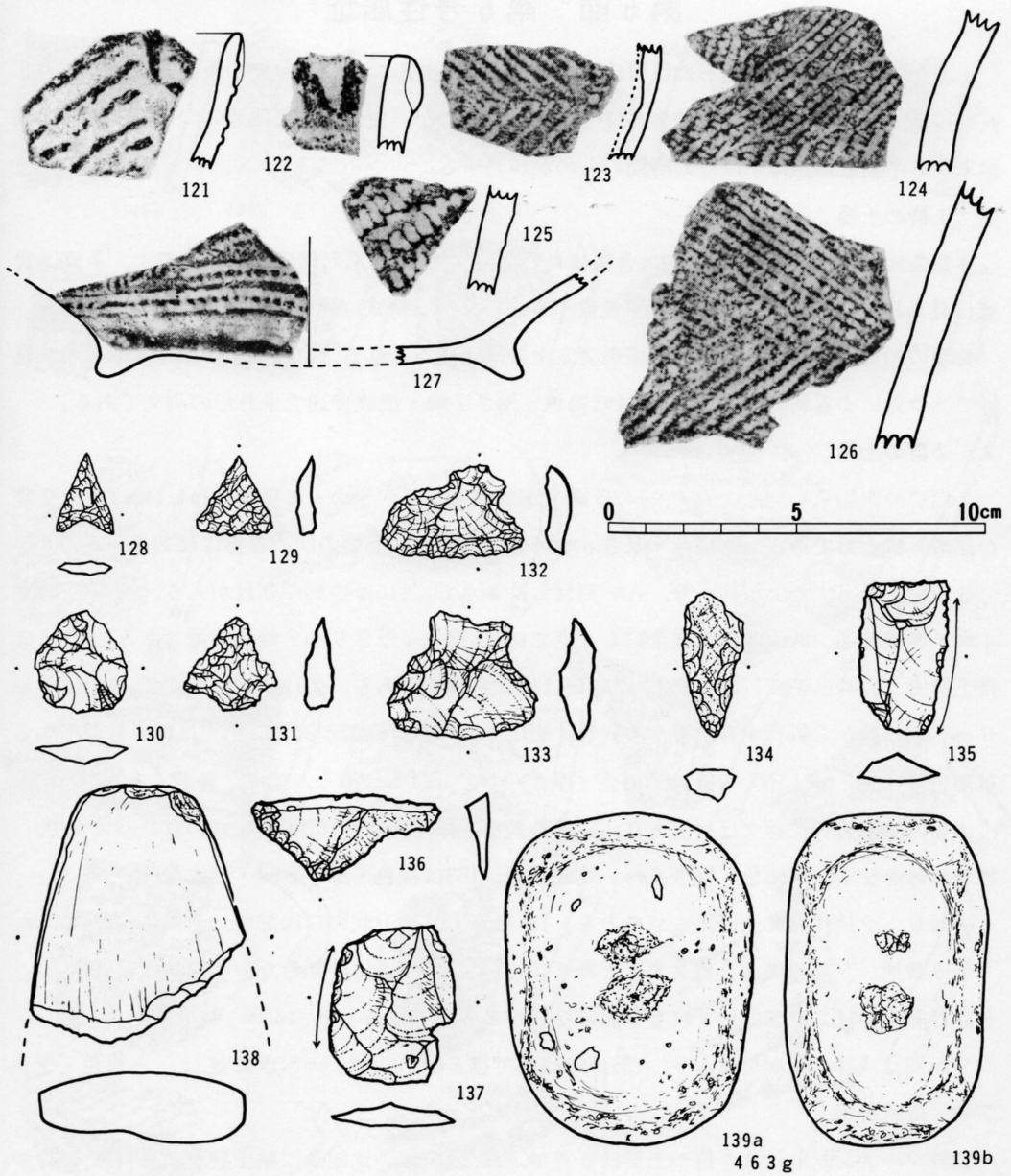
石鏃19点(128・129・130・131)、有茎鏃1点は本遺跡唯一である(131)。石錐2点(134)。石匙4点(132・133)。完形品は横型2点である。磨製石斧1点(138)。定角式で蛇紋岩製。ス

挿図8 第5号住居址の遺物 (1)





挿図9 第5号住居址の遺物 (2)



リ石は3点で不定形の流紋岩礫使用が2点、断面が三角で稜の一部も使用する特殊スリ石に近いもの（流紋岩製）が一点である。凹石は3点、いずれも安山岩製で、8面取りのスリ石兼用のものである。139は3面に凹みを有する。

(註)「新潟県中頸城郡柿崎町鍋屋町遺跡概報」寺村光晴ほか上代文化第29輯 S34

## 第6節 第6号住居址

小さな石囲炉を伴う楕円形の住居址で、周溝も見られる。遺物は早期の条痕文系土器から、前期後葉・最末・中期初頭・前葉の種々のものを含むが、住居址との関連については、前期最終末から中期最初頭にかけての時期のものが該当する。

### 1. 1群の土器

3類条痕文系土器として、140は含繊維貝殻条痕文土器で、爪形様の刺突文が並ぶ。条痕は表裏に見られる。赤褐色・厚さ6mm・焼成やや悪い。ハツ崎式に比定される。1点。

6類の粕畑式に比定される含繊維刺突文土器は4点みられる。141は灰色・厚さ8mm・焼成良好でへら先による刺突が並ぶ。142は暗褐色・厚さ7mm・焼成普通で半月形の刺突である。

### 2. 2群の土器

2類Cの側線爪形文は3点で、143は縄文が加わる。厚さ5mm・赤褐色・144, 145は雲母を含む諸磯b式土器である。暗褐色・厚さ8mm・焼成普通。爪形文の間の隆線には刻目が入る。

3類突帯を有する土器のうち、A一刻目入は3点で、146は山形に刻目が入る。暗褐色・厚さ4mm・焼成普通。断面3角の突帯(C)も3点で147は褐色・厚さ6mm・焼成普通である。D突帯上縄文(特殊凸帯文)は5点あり、148は地文も縄文である。他は地文は無文で、149はキャリパー状口縁から斜行する隆帯が並列し、更に2列の平行隆帯が巡る。胎土は粗く軟質である。黄褐色・厚さ7mm。150, 151は赤褐色・厚さ6mmで、隆帯は細く、焼成は普通である。

4類A半截竹管沈線文は14点あり、諸磯C式が主体である。152のみa式のコンパス文で、波状口縁をなす。灰褐色・厚さ6mm・焼成良好。153は褐色・厚さ6mm・焼成普通。

4類Bへら描沈線文土器は6点である。154はキャリパー状の口縁部で、赤褐色・厚さ7mm・焼成普通。5類の縄文を施文する土器は159点で、第3表に分類した。7類無文は60点。

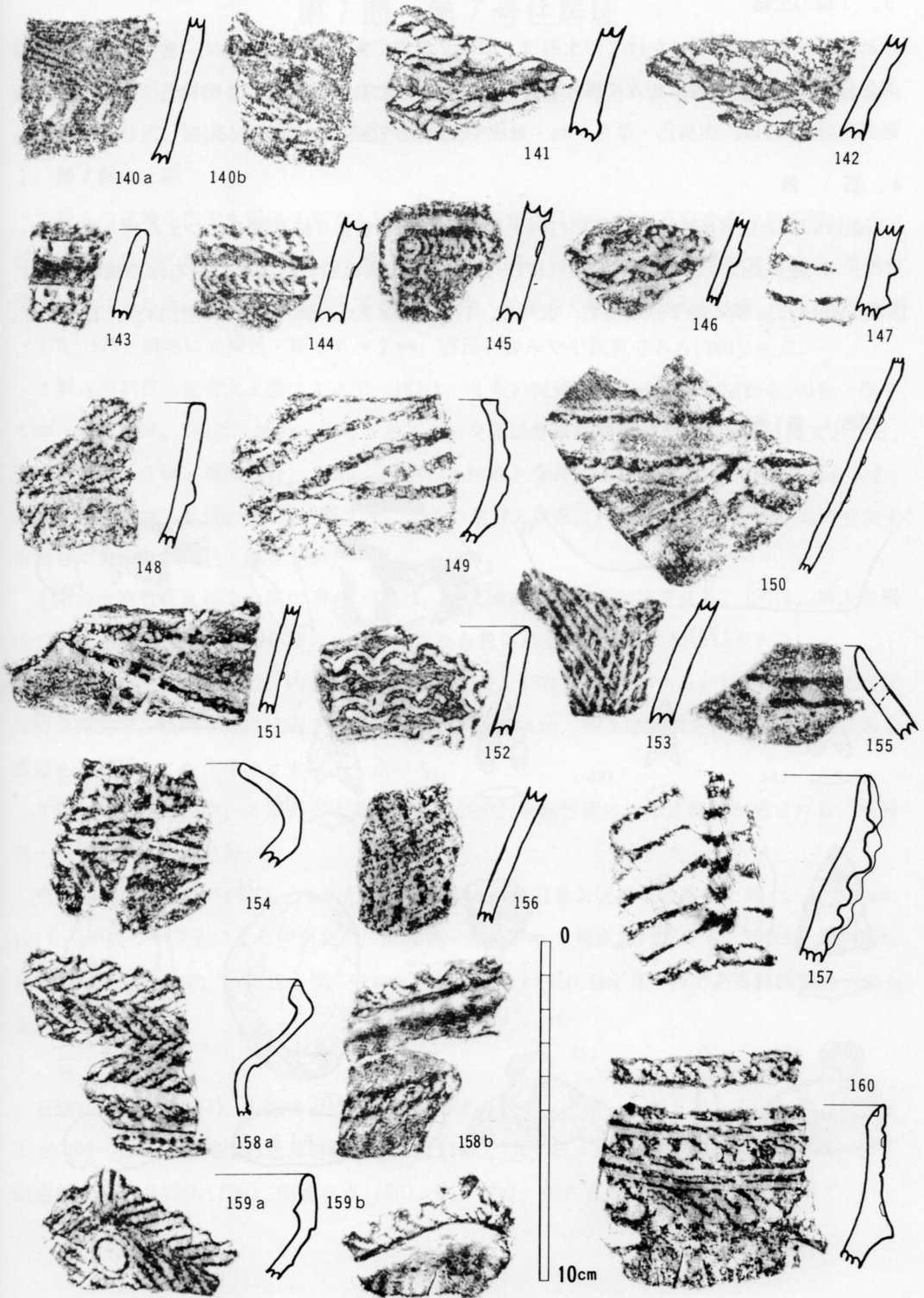
8類丹彩土器は2点で、いずれも裏面に塗彩がある。明褐色・厚さ5mm・焼成普通。

9類列孔浅鉢土器が1点あり、155は口縁部で径5mmの孔が1cmおきに並ぶ。赤褐色・厚さ7mm・焼成普通。

10類ソーメン状貼付文を持つ土器は6点で、156は、細い沈線地に粘土紐を貼り付け、竹管で押し付けている。157は、山形口縁下に6条の平行隆起帯と、縦位の隆帯(爪形入)が見られる。明褐色・厚さ7mm・焼成良好。その他同時期のものとして、158, 159は、縄文と細隆帯連続刻目文の組み合わせを持ち、口縁内面にも縄文帯と、極めて細い爪形刺突3列が巡る、下層対比土器である。赤褐色・厚さ4mm・焼成良好。160も突帯を伴い、沈線とD字形爪形文が口縁下に交互に巡る。口唇にも爪形が施される。赤褐色・厚さ5mm・焼成普通。

これら10類の土器及び3類D土器は、前期から中期への移行期の土器群として把握される。

挿図10 第6号住居址の遺物 (1)



底部資料は15点あり(161) 1点にアンペラ痕を見る。

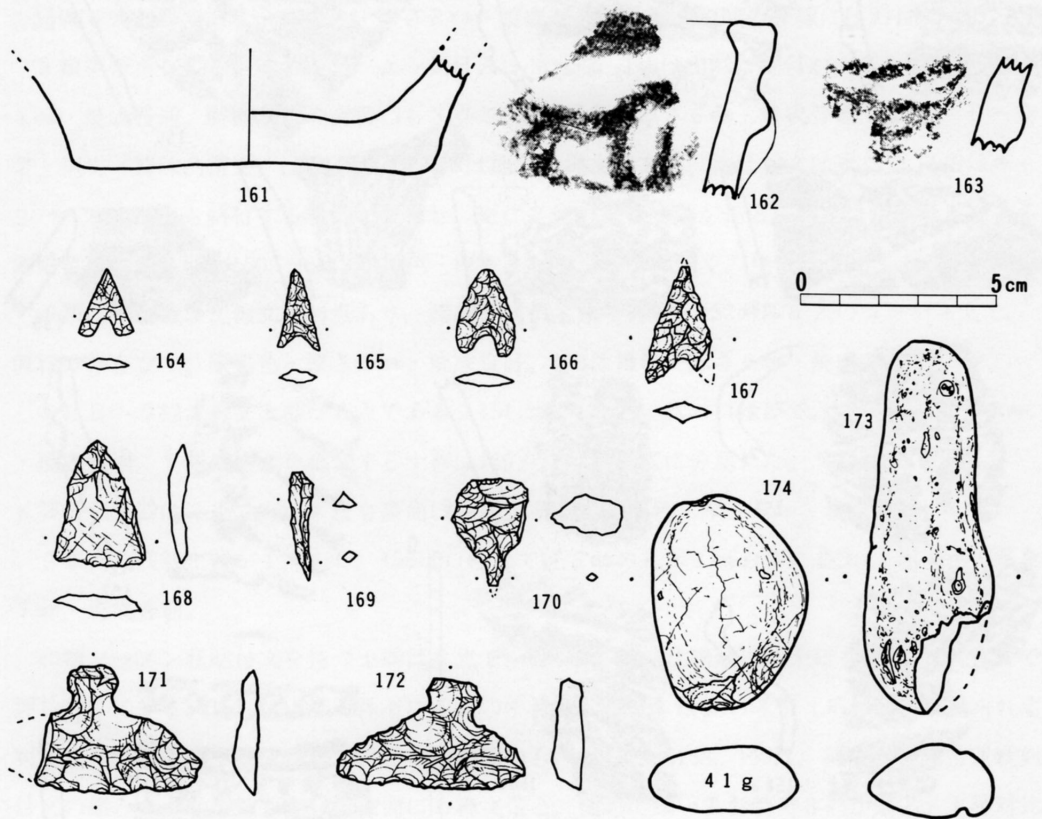
### 3. 3群の土器

前期末から中期初頭にかけての土器は、既に2群内で触れた。その他に、曾利系の中期土器が少量みられるが総数は10点に満たない。162は、隆帯文土器口縁部で、明褐色・厚さ10mm・焼成良好。163は、赤褐色・厚さ9mm・焼成やや軟質の楕円文土器である。

### 4. 石器

石鏃は29点と住居址では一番多い(164~168)。石錐5点(棒状錐2, つまみ付3点, 169・170)。石匙3点は下呂石製横型2点(171~172)、玄武岩製粗製石匙1点。敲石は棒状の砂岩自然礫1点(173)。礫石錘2点(泥岩, 流紋岩, 174), 削器3点。剥片13点。削片14点。石核1点。

挿図11 第6号住居址の遺物 (2)



## 第7節 第7号住居址

円形プランの住居址で、レベルの異なる焼土面から重複も考えられるが、遺物は前期後葉の北白川下層Ⅱ式、諸磯b式の時期に限定される。

### 1. 第2群の土器

2類Aの連続爪形文土器は3点で、175は黒褐色・厚さ4mm・焼成良好な北白川下層Ⅱa式土器である。爪形の中は2.5cmあり、3段以上が並列する。2類Cは、側線爪形文土器で、薄手と厚手に分けられる。前者は灰褐色・厚さ3～4mm・焼成良く縄文が加えられる。4点(176・177・178・179)。後者は赤褐色・厚さ6～7mm、雲母を含みやや軟質である(180)。4点。

3類Aの刻目入突帯文土器は4点で、181は、2条の突帯に斜めの線刻が加わる。褐色・厚さ4mm・焼成良好。182は、断面三角のミミズバレ突帯に直角の刻目が入り、下部は縄文となる。黒褐色・厚さ5mm・焼成良好。183は、白色の大粒砂を含み、貼付突帯に左下りの刻目が入る。灰色・厚さ6mm・軟質。184は、縄文地に1条の刻目入突帯、口唇には外からと内からの交差する刻目が入る。黒褐色・厚さ6mm。

4類の半截竹管沈線文土器は5点。185は、無文地に幾何学文が施される。186は、胎土黒褐色で、表面に白色の化粧土が塗られ、赤色塗彩も見られる。へら描沈線は13点ある。

5類の縄文土器は92点で、内容は第3表に記した。187には穿孔がある。188は、爪形文帯区画磨消縄文で、諸磯a式に比定される。赤褐色・厚さ8mm、胎土は精製され焼成は良好である。雲母を多く含み、キラキラと光る。1点のみ。

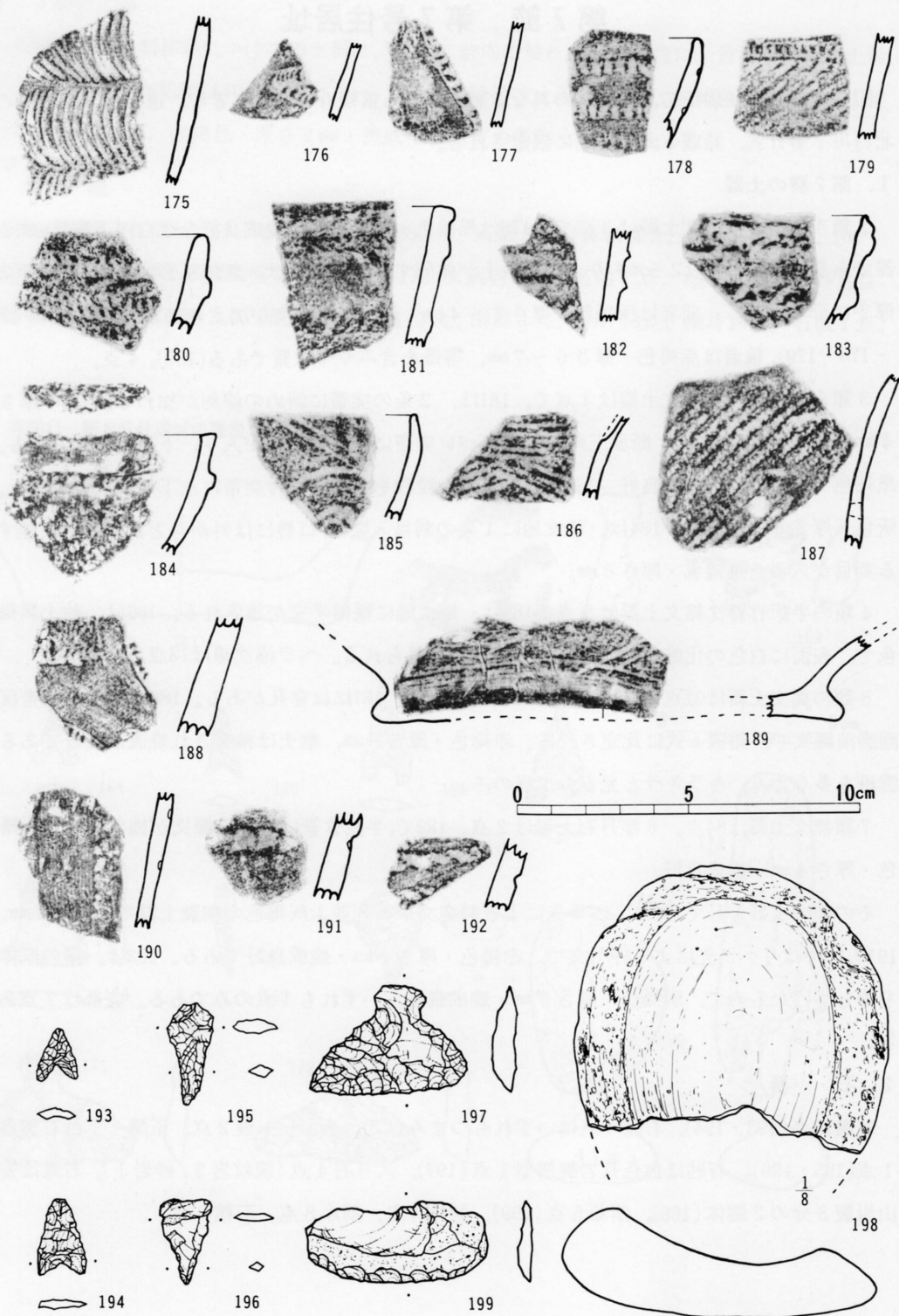
7類無文土器は84点。8類丹彩土器は2点。189で、半截竹管による沈線文が施される。灰褐色・厚さ4mm・焼成良好。

その他の土器として190は、へら先による刺突文が2列並ぶ灰褐色の精製土器で、厚さ4mm。191も、やはりへら先による押引文で、赤褐色・厚さ8mm・焼成良好である。192は、縄の原体を押しつけたもので、灰褐色・厚さ6mm・焼成良好。いずれも1点のみである。底部は7点ある。

### 2. 石器

石鏃16点(193・194)。石錐4点はいずれもつまみ付で、チャート製2点、玉随・下呂石製各1点(195・196)。石匙は白色頁岩製横型1点(197)。スリ石4点(流紋岩3、砂岩1)。石皿は安山岩製3分の2個体(198)。削器5点(199)。剥片17点。削片8点。石核3点。

挿図12 第7号住居址の遺物



## 第 8 節 第 8 号住居址

円形プランで、長方形の石組炉を有する中期中葉の住居址である。出土土器は、井戸尻式土器を主体に少量の船元式土器と、混入の前期土器を見る。

### 1. 2 群の土器

200は、2 類Cの側線爪形文土器で、チョコレート色の地肌に幾何学的な文様を展開する、諸磯b式土器である。厚さ8mm・焼成良好。201は、4 類A半截竹管沈線文で、褐色・厚さ9mm・焼成やや弱い諸磯C式土器である。各1点。

### 2. 3 群の土器

〈1 類〉 船元III式土器。202・204は船元III式土器のキャリパー状口縁部である。暗褐色の胎土に白色の砂粒を混じえ、焼成はあまり良くない。貼付隆線によるH字状の文様で構成され、隆帯間には櫛描状の沈線が走る。厚さ7mm。2 個体4 片がある。210も縄文地に縦位の浅い沈線が入る船元式土器であろう。

〈2 類〉 信州系土器

a：隆帯による抽象文・櫛描文の施された井戸尻式土器である。色調は赤褐色、暗褐色、厚さ8～10mmで、焼成は普通のものとはポロポロに崩れる粗悪なものがある。203は抽象文の口縁部で隆帯に半截竹管と沈線が組み合わされる。櫛形文破片とあわせて2～3 個体40片あまりを数える。

b：205は黄褐色で砂粒を多く含む粗質の土器で、山形の口縁を持つ。隆帯と半截竹管文・沈線文で構成される。厚さ10mm。1点。ツルネ遺跡のC-3 類に共通性を見る。<sup>(註)</sup>

C：206はP<sub>7</sub>出土の沈線文深鉢で、褐色・厚さ9mm、焼成良好。表裏面とも磨かれる。無文帯をはさんで、上下に単純な浅い沈線が並ぶ。表面に彩朱の痕跡がある。1点。

d：無文浅鉢土器で、同一個体7 片が床面やピット内に散在していた(207)。黄褐色・厚さ・焼成良好。

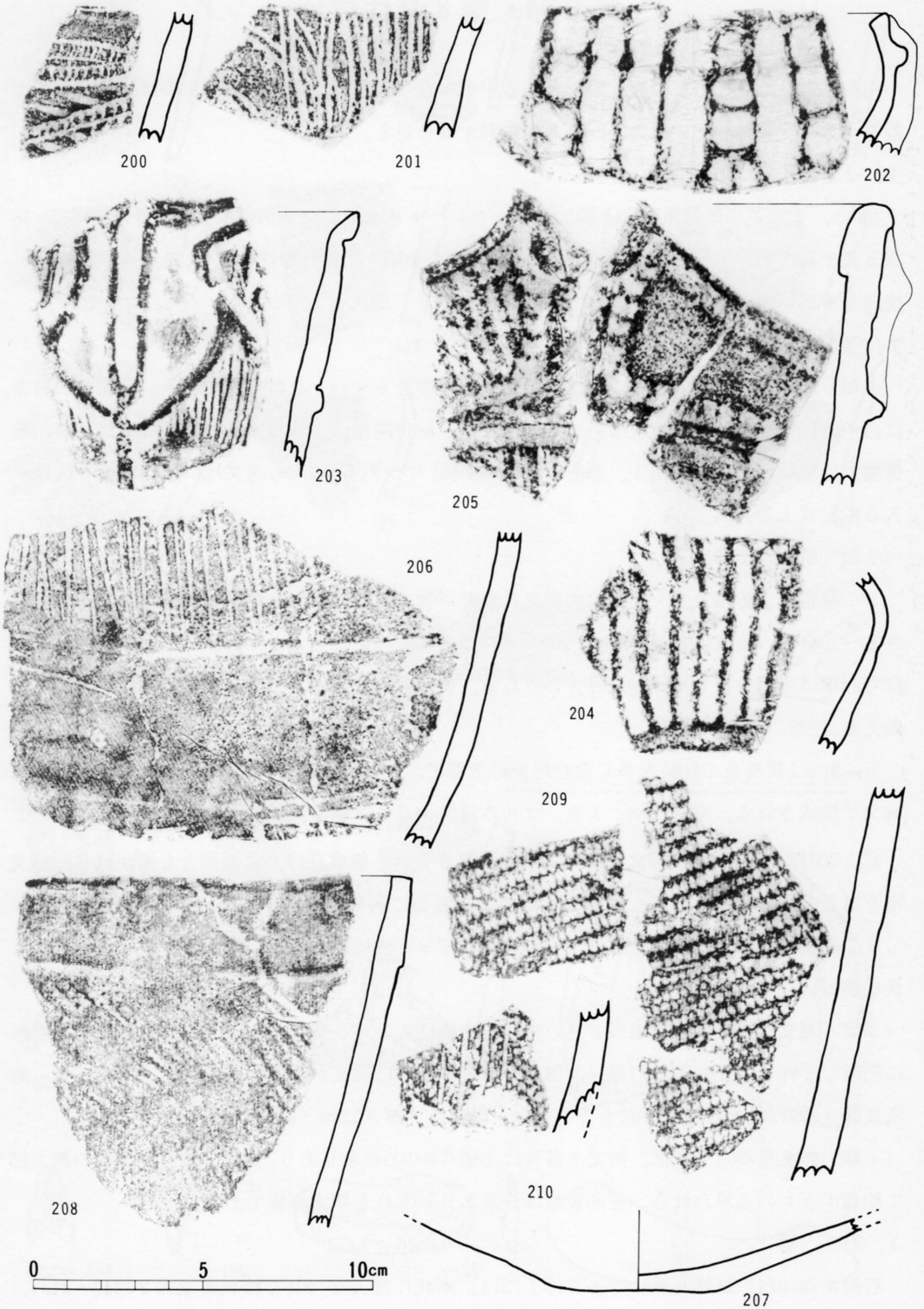
〈3 類〉 縄文が施文される土器で、いずれも深鉢破片2～3 個体がある。208は口唇部がわずかに肥厚して縁帯をなし、この部分は無文である。胴部に縄文が施される。褐色・厚さ8mm・焼成良好。209は胎土が粗く砂粒を多く含む。暗褐色・厚さ12mm・焼成良好。

〈4 類〉 無文土器及び底部。無文土器片は小破片が100点余りあり、大部分が2 類土器の無文部に相当するものと思われる。底部資料は5 点ありいずれも無文平底である。

### 3. 石 器

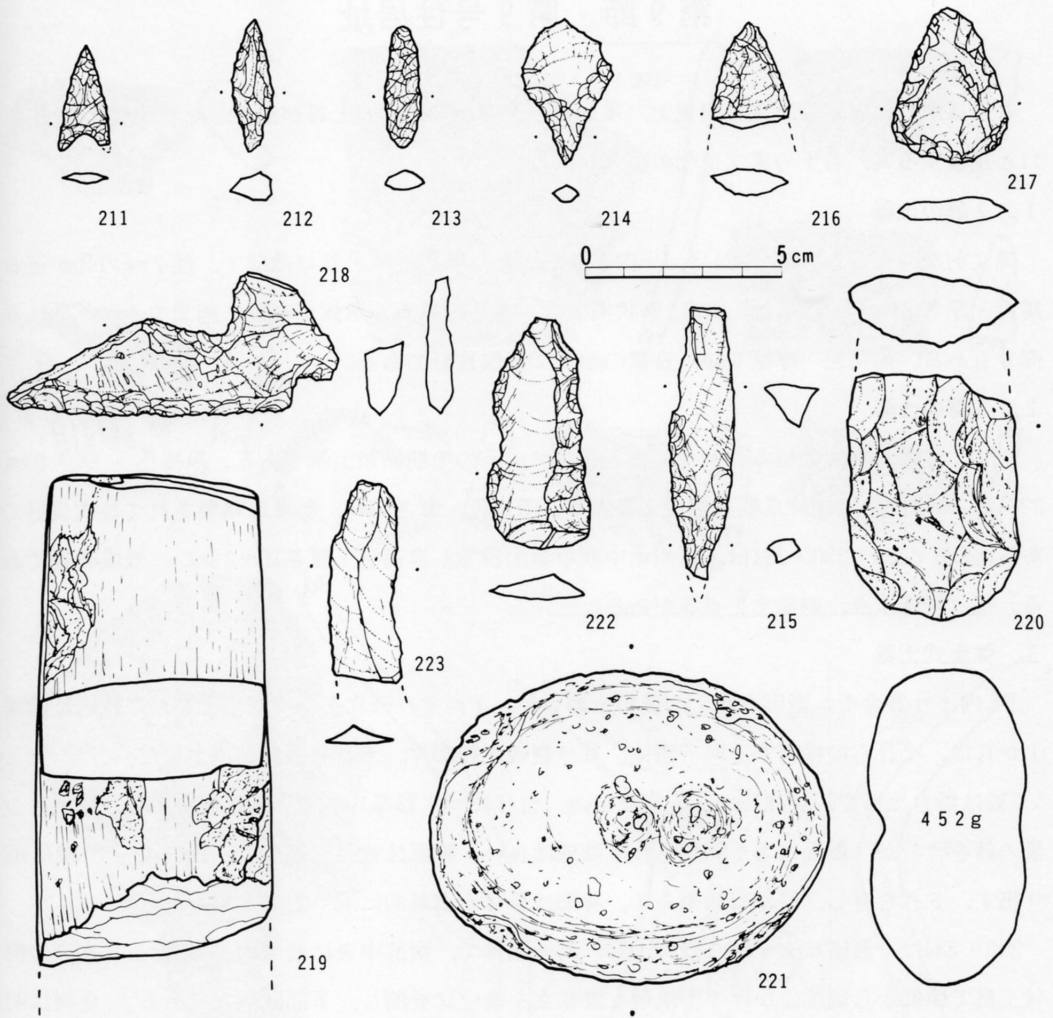
石鏃4 点(211)。石錐5 点(つまみ付1 (214)、棒状片端尖2 (215)、棒状両端尖2 (212・213))。

挿図13 第8号住居址の遺物 (1)





挿図14 第8号住居址の遺物 (2)



石槍は3点で木葉形に近い(216・217)。石匙は玄武岩製横型粗製石匙1点(218)。磨製石斧は定角式2点(219)。打製石斧は玄武岩製2点(220)。スリ石は砂岩製円礫の一面に使用痕のあるもの1点。凹石は安山岩・流紋岩製各1点(221)。敲石は棒状流紋岩自然礫で敲打痕を残す。石皿は安山岩製8分の1個体。削器7点(222)。剥片9点(223)。

前期のものと比較して、石材にバリエーションがあり、凝灰岩、ホルンフェルス等の石材使用が特徴的である。

(註) ツルネ遺跡発掘調査報告書 高山市教育委員会 1978

## 第9節 第9号住居址

弥生後期の住居址で、住居内覆土、及びピット内から弥生式土器が出土した。東壁部でSB11と重複する為、若干の縄文遺物の混入がある。

### 1. 2群の土器

縄文前期の土器として、224は、P<sub>1</sub>内より出土した列孔浅鉢土器口縁部で、径7mmの孔が巡る。褐色・厚さ8mm・焼成普通。225は羽状縄文で、撚りの異なる原体を交互に施文するが、乱れる部分もある。黒褐色・厚さ8mm、良質の胎土で焼成良好である。

### 2. 3群の土器

226は、沈線と縄文の組み合わせによる五領ケ台系の中期初頭土器である。黒褐色・厚さ6mm  
227は、口縁部に隆起線爪形文帯が2条巡る。明褐色・厚さ10mm、胎土は精製されて焼成良好である。228・229・230・231は、信州系中期中葉土器で、赤褐色・厚さ10~12mm・焼成普通である。他に底部1点、刺突文1点等がある。

### 3. 弥生式土器

P<sub>5</sub>内より器台1、壺形土器1、甕形土器2が、それぞれ破片となって出土した。住居址内覆土からは、それらに接合する同一個体、及び甕破片約20片、土器底部2が出土した。

232は器台土器で、現高12cm、推定高14cm、台径13cm、器厚10mmで、黄褐色を呈し、胎土に少量の砂を含むが、器面はよく調整されて焼成は良い。脚部は截頭円錐形で、裾に至って横に張り出す。3孔を有し、径は11mmである。身部は恐らく直線的に開くものと思われる。

233・234は、櫛描状文を持つ壺形土器、同一個体で、胴部中央に最大巾がある。6本歯の櫛状工具で頸部から胴部にかけて不規則な波状文を横位に展開し、下部は無文である。色調は明褐色でススが部分的に厚く付着する。厚さ7mm、砂粒を含み焼成良好である。

235は甕形土器で、口縁が少し開き胴部はゆるやかにカーブを描く。<sup>(註1)</sup>表面には縦位の条痕調整裏面には斜位の調整痕が見られる。明褐色・厚さ7mm・焼成普通。236も同様の器形で黒褐色・厚さ8mm・焼成良好。237は、底部近くの部分である。239は底部で、径7.2cm。植物繊維の痕跡が残る。

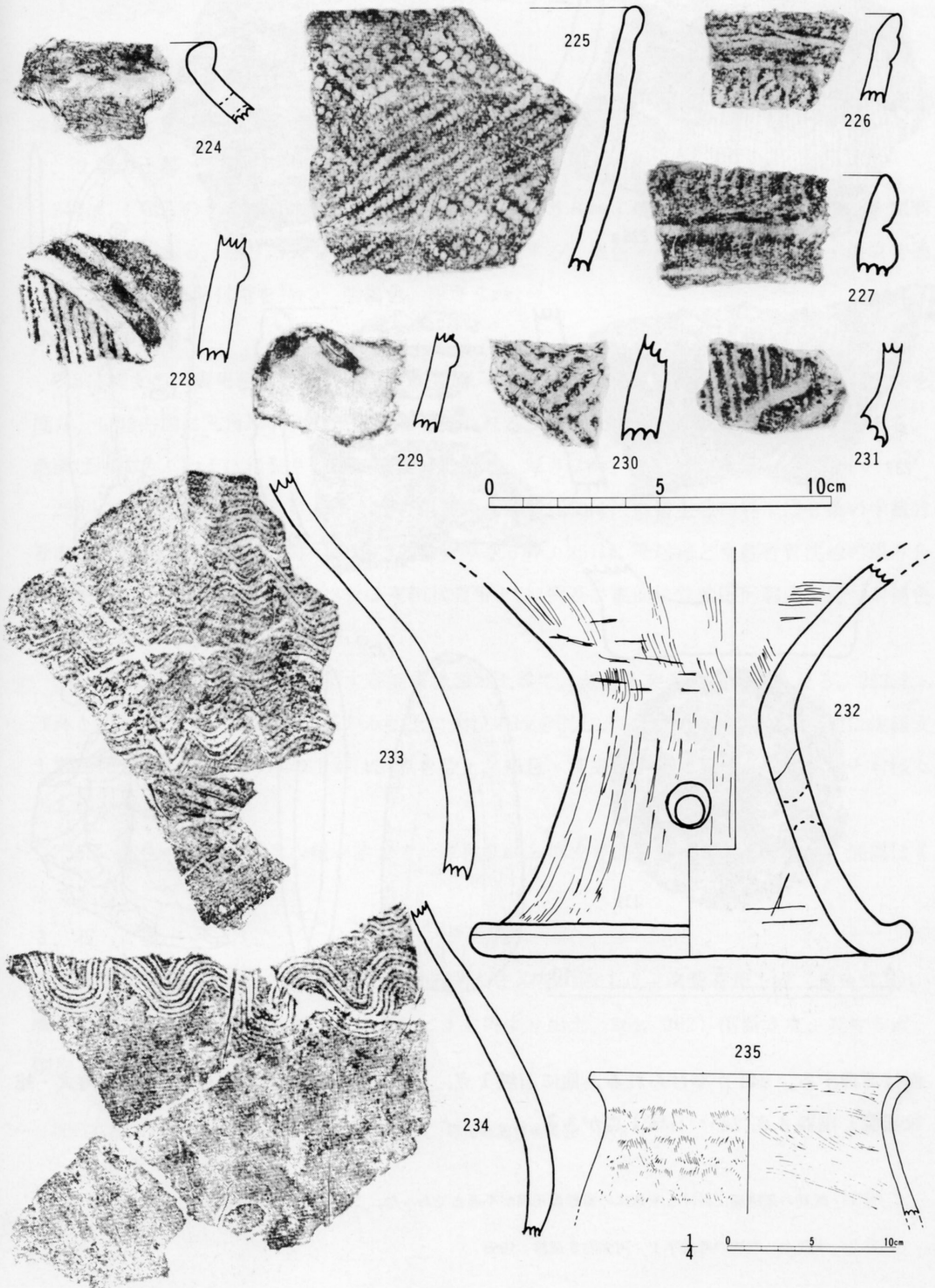
### 4. その他

238は沈線による工字文風の文様が描かれる晩期の土器と思われ、阿弥陀堂式に類似する。<sup>(註2)</sup>黄褐色・厚さ11mm、砂粒を多く含みやや軟質である。

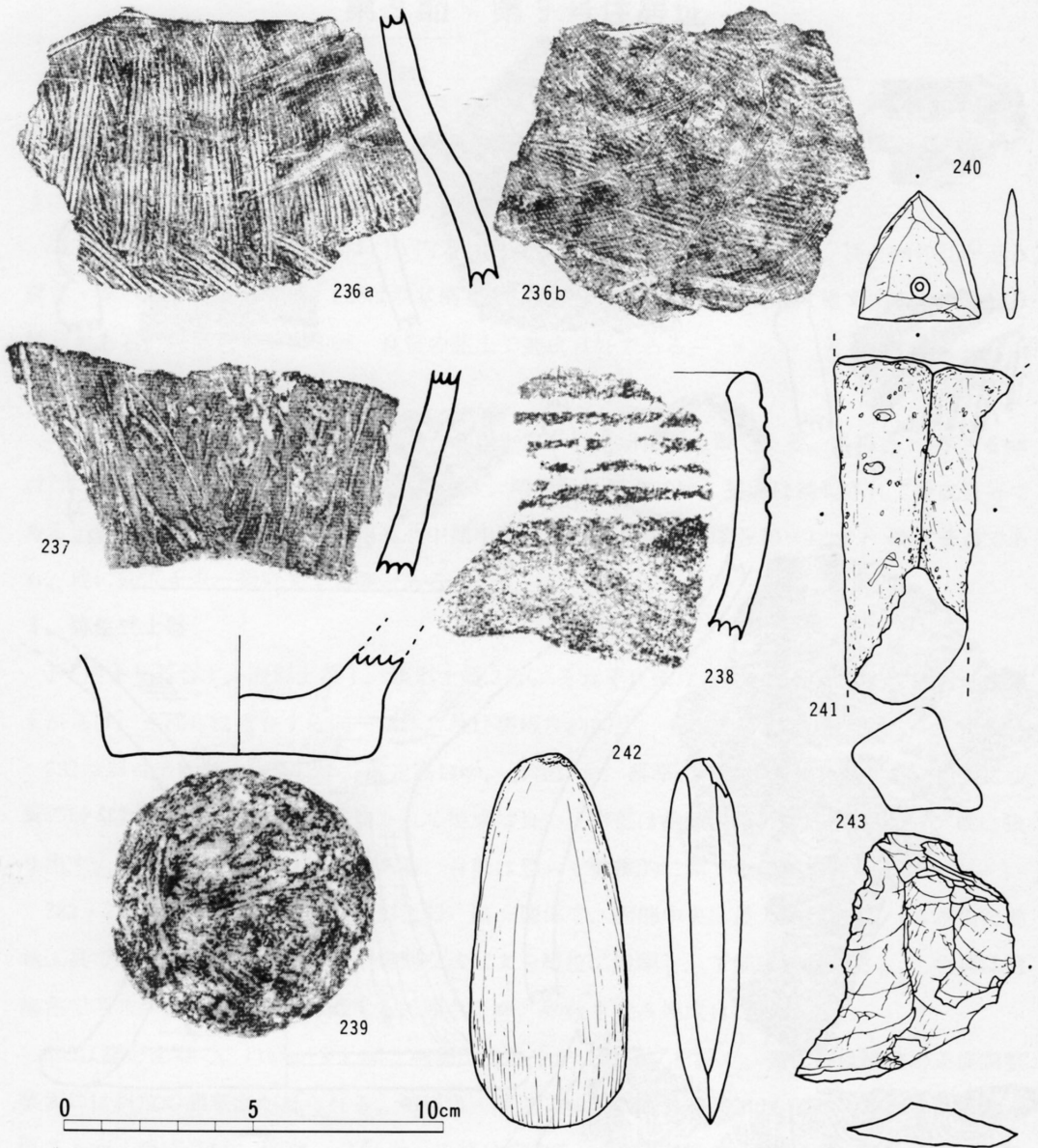
### 5. 石器

弥生期のものとしては、磨製石鏃1点(粘板岩製, 240) 安山岩系砥石1点(4面を持ち、2

挿図15 第9号住居址の遺物 (1)



挿図16 第9号住居址の遺物 (2)



面は湾曲する。241が挙げられる。他に石鏃1点、石錐1点、磨製石斧1点(242・定角式・蛇紋岩製)。削器3点(243)石核1点がある。

(註1) 既刊の遺構編における本個体の器形復元図が不適當であった。ここに訂正しておきたい。

(註2) 大江命「飛騨の考古学Ⅰ」阿弥陀堂遺跡 1965

## 第10節 第10号住居址

石囲い炉を伴う住居址で、隅丸方形プランと思われる。前期の土器を少量混じえるが、主体は新崎式など中期前葉土器である。

### 1. 2群の土器

244は、4類Aの半截竹管沈線文である。赤褐色・厚さ8mm・焼成良好。245・246は、5類羽状縄文土器である。撚りの異なる原体を交互に施文する。褐色・黒褐色・厚さ6mm・焼成普通。247は、縄文地に貼付帯を持つ。明褐色・厚さ7mm。

### 2. 3群の土器

248は縄文で、黄褐色・厚さ7mm・焼成普通。249は、口縁下に2条の半截竹管連続刺突文を持ち、口唇内側に三角形の沈線が連続して見られる。蓮華文の先駆形態とされるものである。<sup>(註)</sup>色調は明褐色、胎土は精製されて焼成良好である。厚さ7mm。1点。

250・251は、胎土に白色砂を多く含む粗質の土器で、250は、口唇上と口唇下に2条の半截竹管の連続刺突文が巡る、浅鉢形土器である。厚さ6mm。251は、隆起線と半截竹管沈線の組み合わせを持ち、厚さ11mmである。252は連鎖状突帯と、口唇及び裏面に竹管円形刺突を持つ黄褐色土器で、厚さ6mm・焼成良好である。

253, 254, 255は、赤褐色を呈する焼成普通の土器で、刻目入突帯や沈線文を見る。253は、浅鉢と思われる。厚さ7mm。255のみ胎土に大粒の砂を混じえ、厚さ10mmである。他に沈線文土器が12点ある。縄文のみの土器は31点を数え、褐色・黄褐色・赤褐色で、厚さ焼成とも種々のものがある。

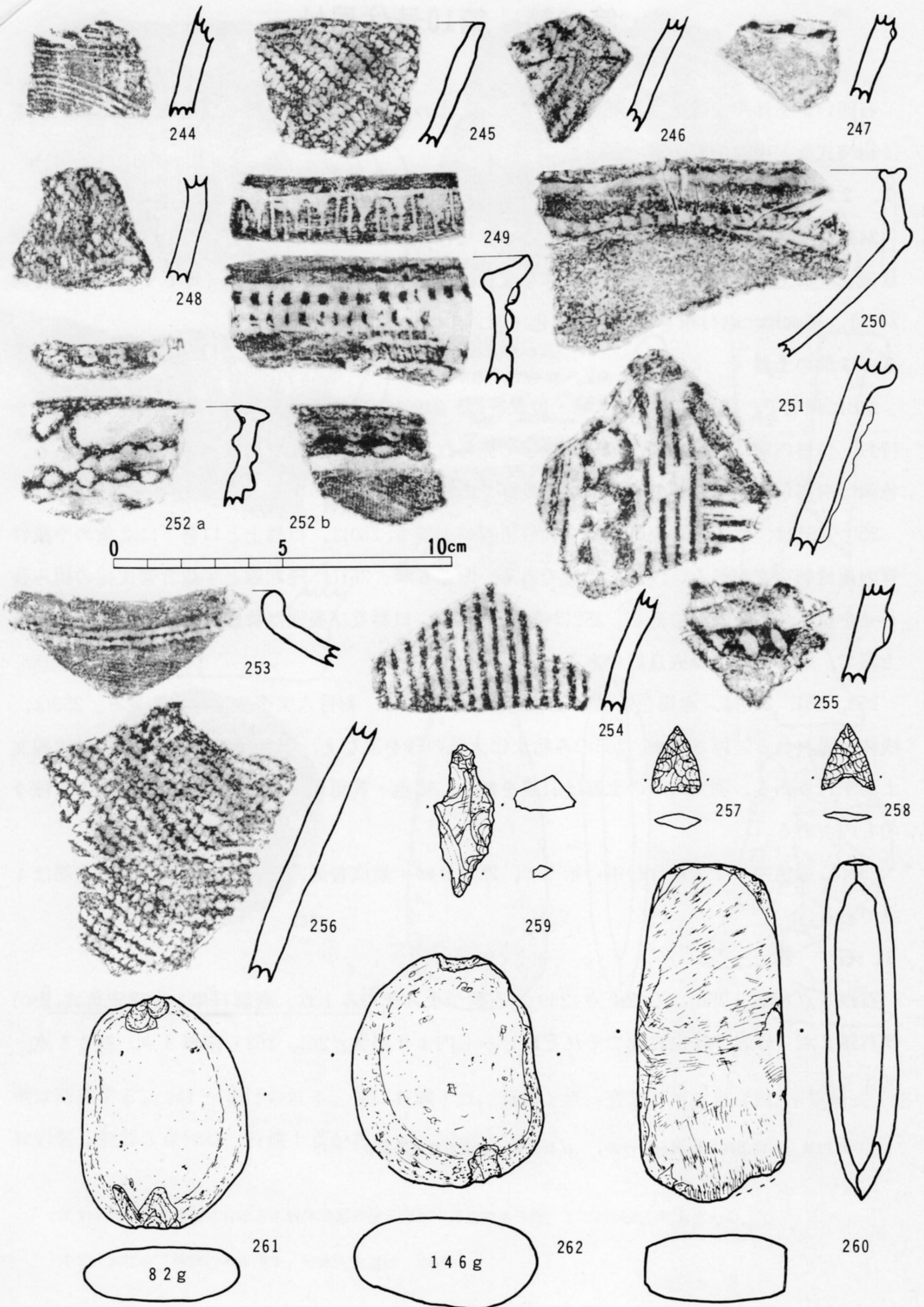
256は、赤色のパミスを含む粗い胎土で、厚さ9mm・焼成普通。無文土器片は33点、底部は4点である。

### 3. 石器

石鉄8点(257・258)。石錐2点(259)。石匙つまみ部のみ1点。磨製石斧1点(定角式, 260) 礫石錐2点(砂岩・安山岩製でそれぞれピット内より出土。261, 262)。削器3点。剥片5点。削片5点。

(註) 渡辺誠「古宮遺跡発掘調査報告書」IV群F類 勝山市教育委員会 1978

挿図17 第10号住居址の遺物



## 第11節 第11号住居址

プラン不明の住居址で、10号・12号との切り合い関係及びピット内の土器により、縄文前期の住居址と推定される。遺物は微量である。

### 1. 2群の土器

7類無文土器が4点、P<sub>3</sub>より出土している。最深部の1点は明褐色・厚さ5mm・焼成良好である。8類丹彩土器が2点あり、263は厚さ4mm、明褐色の精製土器で表面に塗彩がある。264は列孔浅鉢口縁部で、口唇と内面に塗彩が残る。表面はよく研磨されている。厚さ6mm。

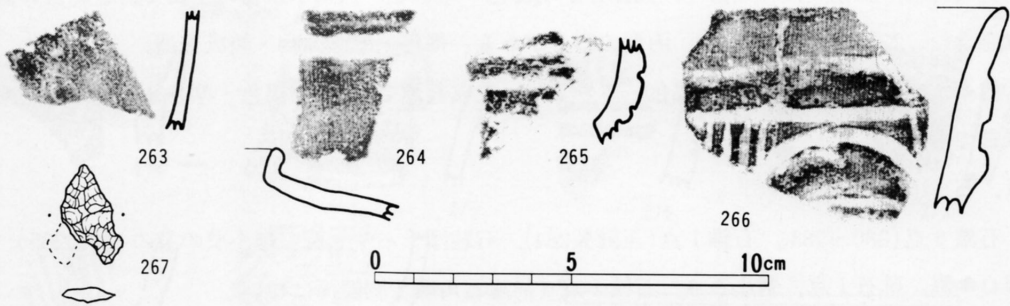
### 2. 3群の土器

265、266は隆起線文土器で、口縁は直上し円形の隆帯文等が見られる。褐色・厚さ9mm・焼成普通。

### 3. 石器

チャート製の石鏃が1点出土している(267)。脚部つけ根に抉りが入る、変形の凹基鏃である。

挿図18 第11号住居址の遺物



## 第12節 第12号住居址

円形プランの住居址で、中期前葉の時期に位置づけられる。前期後半の土器が混在する。住居址内西隅に於いて、新崎系深鉢土器大破片が出土した。

### 1. 2群の土器

2類Aの連続爪形文土器が1点ある。下部は縄文となり、灰色・厚さ4mm・焼成普通(268)。269は2類Cの側線入爪形文で、黒色・厚さ4mm・焼成普通。270は、突帯上に縄文の入る3類

Dの土器である。褐色・厚さ5mm, 雲母も少量含む。5類の縄文は6点で、いずれも褐色・厚さ4~5mm・焼成は良い。271は9類列孔浅鉢土器で、口縁は立ちあがらず、ヘラによるS字状文、幾何学文が描かれる。孔は径4mmで、1.1cm間隔に穿たれる。暗褐色・厚さ7mm・焼成普通。縄文地にソーメン状貼付文のある10類土器は1点で、褐色・厚さ6mm・粗製で軟質である。その他無文の浅鉢が1点ある(272)。赤褐色・厚さ5mm・焼成良好。内側にヘラで押された跡を見る。

## 2. 3群の土器

①273は、半截竹管による半隆起帯に、刻目(口唇部)や竹管連続刺突の入る深鉢土器である。上部文様帯は6列で構成され、1列おきに竹管が加わる。最上列は口唇となって部分的に隆起し、口縁に波状のアクセントをつけている。巾2.5cmの無文帯を挟んで再び7列の文様帯があり、2列おきに竹管刺突の帯がある。列は途中で直角に向きをかえ、次に渦巻の陰刻文となって右側に展開していく。中央より下部は、RLの縄文となっている。胎土は白色の砂粒を多く含んでやや粗く、軟質である。青灰色・厚さ10mm。

②リボン状突帯の土器がある。274は、単節縄文地に角ばった突帯がつく。暗灰色。厚さ8mm・焼成良好。275は、無文地に突帯があり暗褐色厚さ6mm・焼成普通である。276は、三角突帯に刻目が入る。褐色・厚さ9mm・焼成良好。

③縄文のみの土器片は26点あり、大部分が明褐色・厚さ9~11mmの軟質の土器である。白い砂粒を含む。277は口縁部破片で、円形の凹みがある。褐色・厚さ8mm・焼成普通。

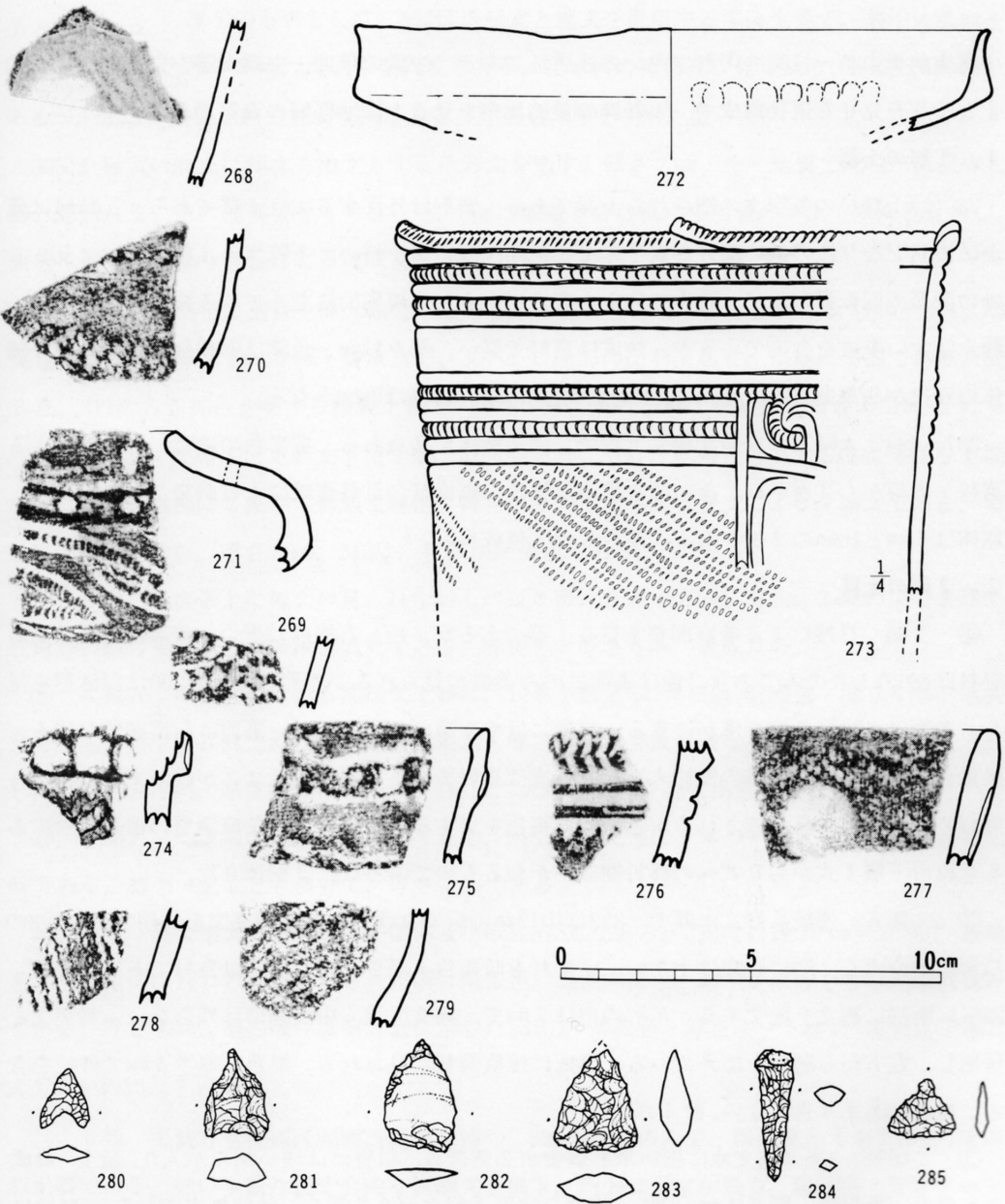
④撚糸文が5点ある。278は明褐色・厚さ7mm・焼成普通で279は黒褐色・厚さ6mm・焼成やや軟質である。

## 3. 石器

石鏃6点(280~283)。石錐1点(玉随製284)。石匙はチャート製の超小型のもの1点(285)。凹石1点。砥石1点。剥片3点。石核1点(黒曜石角礫で剥離面はない)。



挿図19 第12号住居址の遺物



## 第13節 第13号住居址

縄文前葉中葉～後葉の円形プランの住居址である。少量の早期・中期土器を含むが、比較的まとまりを見せる遺物構成で、土器群の量的比率を見る上には格好の資料である。

### 1. 1群の土器

286は、1類Cの菱形文の施される土器である。器形は外反する尖底土器であろう。口縁は僅かに波状となり波の低い部分からそのまま裏面へ浅い溝が斜めに下降する。施文は、1辺2.5cmの菱形の回転押型文で、途中で向きを変えているため規則的に並んでいる様には見えない。胎土は太い繊維を含んでいるが、焼成は良好で堅い。厚さ11mm・色調は赤褐色、1点。同一個体の資料が北東地点にある。(北東地点461 P 56)。口径は36cmとなる。

287、288は4類Bの貝殻沈線文土器で、同一個体が2点ある。黄褐色の地に、ヘラ先による直線・波線がくり返され、その間を埋める様に、鋸歯状の貝殻腹縁による刺突がなされる。原体は6mmと10mmの2種がある。厚さ7mm・焼成良好。

### 2. 2群の土器

① 1類 貝殻による条痕調整を見る土器であるが、むしろ擦痕に近い。表裏に条痕のある資料は289の1点のみであり、他は表面にのみ条痕が見られる。器形の伺える290は深鉢形を呈し、表面に2枚貝条痕を僅かに見る。口唇にはやや深い刻みが入り、裏面は指痕調整が残る。黒褐色・厚さ4mm、雲母の微粒末を含み焼成は良好である。表面にはススが付着する。291も、同類で口唇上に刻目が施されるが色調は明褐色を呈する。これらは、条痕調整の消失段階である北白川下層I式からII式への移行期にかかわるものであろう。3個体9片。

② 2類A 連続爪形文土器で、292は巾17mmのシュロ状爪形文に刺突文を併用する。293の爪形はやや太く、逆に刺突は小さい。いずれも暗褐色・厚さ4mmで焼成は良好である。294、295は、胴部に縄文を施文する。爪形の中は7mmで、施文は浅く中央部には残らない。刺突文を併用し、左方から刺突を加えている。裏面に擦痕調整が見られる。黒色・厚さ5mmで砂粒を含み、焼成はあまり良くない。計4点。

③ 2類B 296は無文地に細い爪形刺突が2条巡る。口唇には浅い刻みが入り、胎土・焼成とも良好。黒褐色・厚さ4mm。297、298はC字形爪形文が2条巡り、他は無文である。口唇には深い刻みが入る。黒色・厚さ4mm・焼成普通。(清水ノ上II式対比)。299は、逆D字形爪形文で、縄文を併用する。暗褐色・厚さ4mm・焼成良好。300は、爪形原体中央に刻みを入れた特殊なD字形文を並列するもので、口縁は波状となり、口唇には細い刻みが入る。赤褐色・厚さ4mm・焼成良好。計9点。

④ 2類C 側線入爪形文土器で、薄手と厚手のものに分けられる。301, 302は暗褐色・灰褐色の焼成堅緻な土器で、厚さ4mm。無文地に爪形文が斜行・蛇行する。302は、波状口縁である。計4点。厚手のものとして、303は爪形文と縄文を併用する深鉢土器で、若干の繊維を含む。茶褐色・厚さ9mm、焼成やや軟質である。径6mmの補修孔が見られる。304は、同類であるが、胎土が精製されて焼成堅緻である。赤褐色・厚さ7mm。計3点。

305は砂質の胎土に縄文を地文とする爪形文を施す。厚さ7mm・やや軟質で北白川Ⅲ式の土器と思われる。その他異質なものとして、306は繊維を含む極めて粗質の胎土で黒褐色を呈し、側線爪形文とやはり竹管による波状文を組み合わせている。厚さ6mm。

⑤ 3類A 突帯に刻目を伴う類で、その多くが縄文を併用すると思われる(307~311)。黒褐色・明褐色・厚さ4~5mm・焼成良好。307は口縁部の山形突起で、頂端は平面である。計8点。311のみ赤褐色を呈する精製土器で、厚さ7mm、列孔浅鉢土器に類するものであろう。

⑥ 3類B 突帯上に爪形文を施す類で計2点ある。312は、赤褐色を呈する焼成堅緻な土器で、口唇と口縁部に2条の爪形施文隆帯を持ち、その下は半截竹管文による沈線文である。胎土には雲母を含む。厚さ8mm。313は、色調が黒褐色である。

⑦ 3類C 突帯上に施文の見られないものは小破片6点である。314は、2条の突帯と別に三角形の貼付突帯をもつ口縁部破片である。赤褐色・厚さ6mm・焼成良好。

⑧ 4類A 半截竹管による沈線文土器は、14点を数える。315は暗褐色・厚さ4mmの焼成良好な北白川下層Ⅱ式土器(?)。316は赤褐色・厚さ8mm・焼成堅緻な諸磯C式土器。他はそれぞれ、胎土・色調・厚さに変化を持つ。317は、大粒の砂を含む明褐色の軟質土器である。

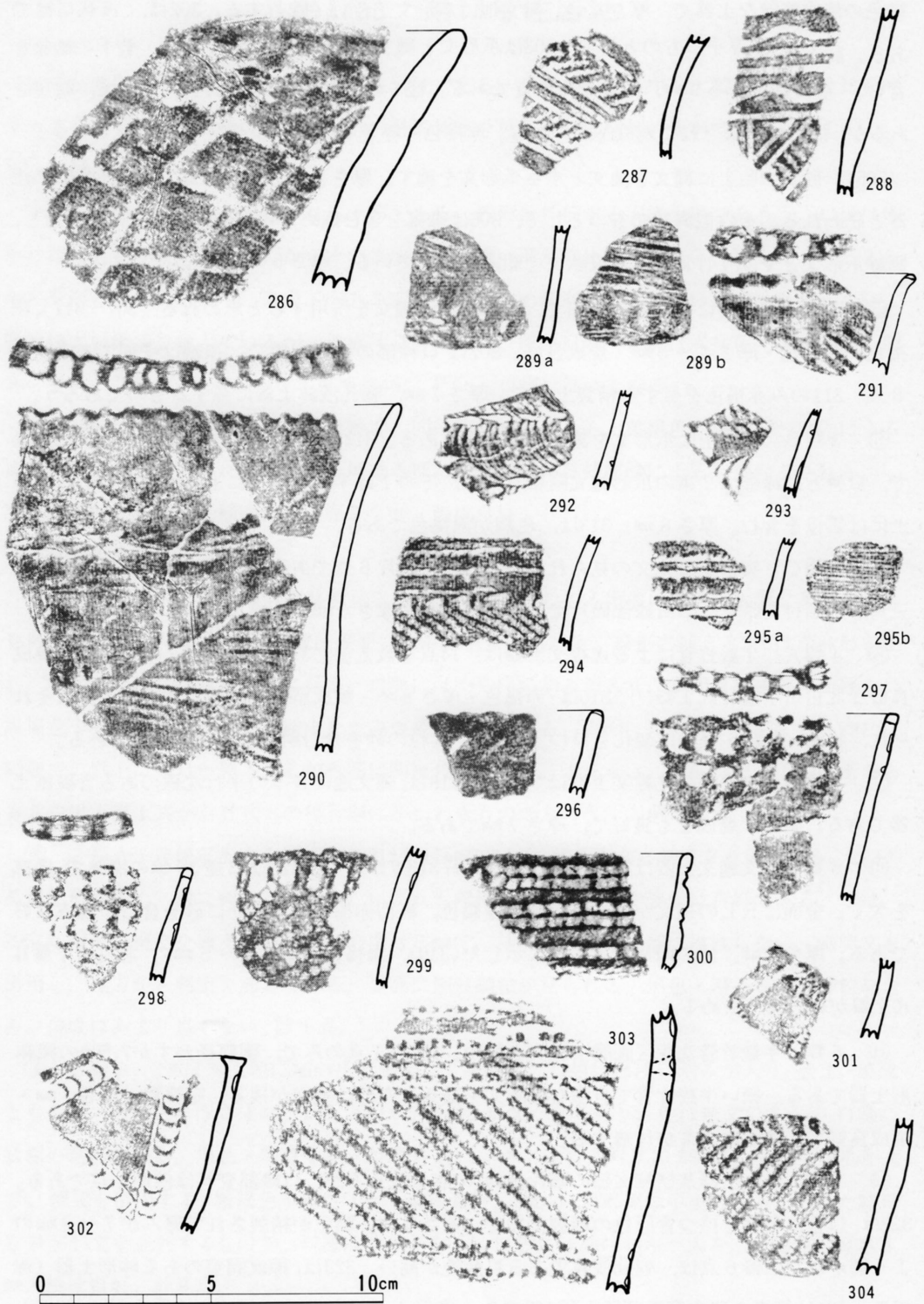
⑨ 4類B ヘラ描の沈線文土器は3点で、318は、縄文地に3本の平行沈線のある含繊維土器である。胎土・焼成とも良好で、厚さ7mmである。

⑩ 5類 縄文施文土器は深鉢半個体及び破片313点がある。320は口径36cmの深鉢で底部を欠く。全面にRLの縄文が施され色調は暗褐色、裏面赤褐色、わずかに砂を含むが焼成良好である。厚さ7mm。他の破片は第3表に示した(319)。黒褐色・厚さ4~5mmの北白川下層Ⅱ式土器が約15%を占める。

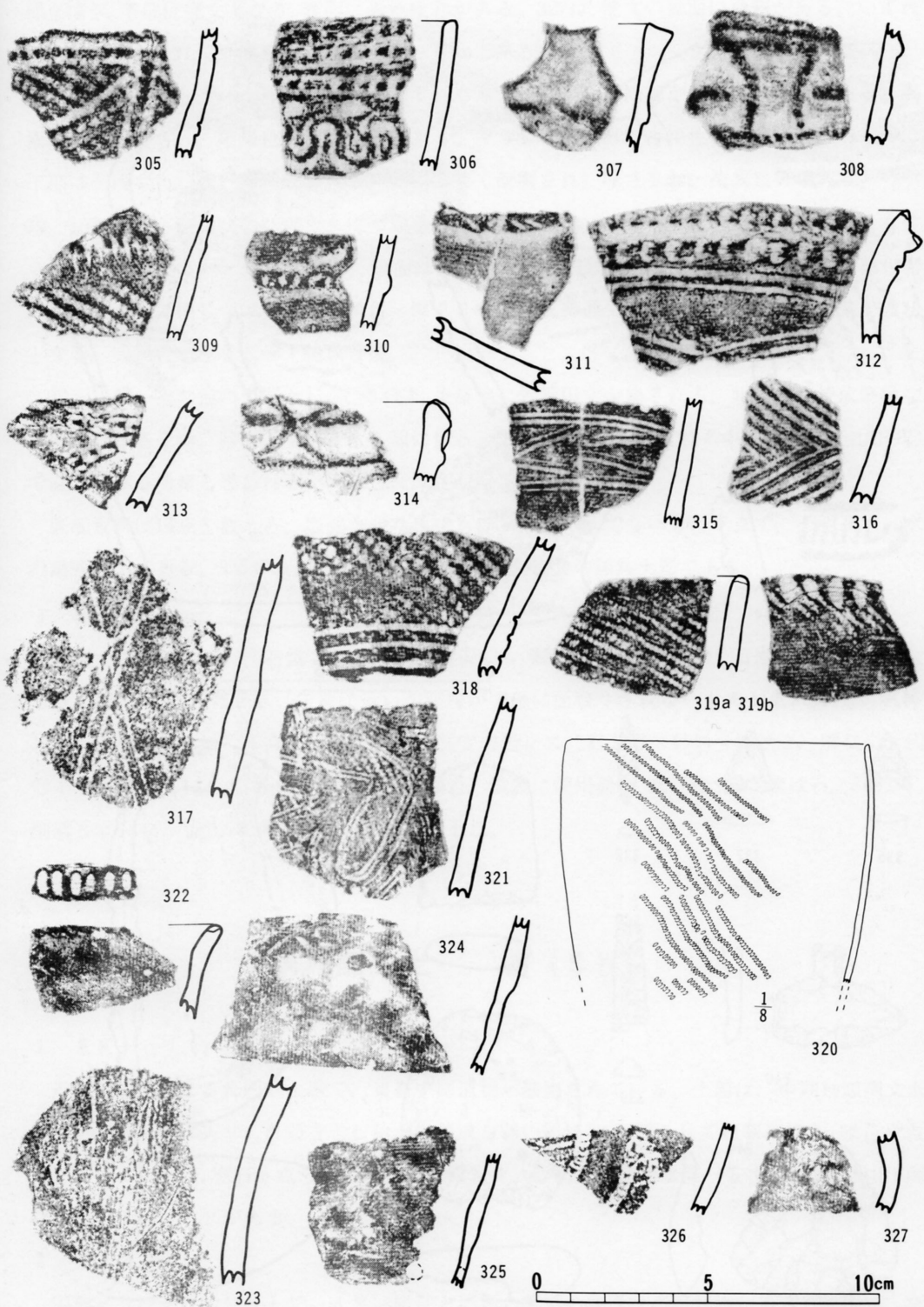
⑪ 6類 半截竹管沈線区画磨消縄文を持つ。321の1点のみで、胴部径わずか7.5cmの深鉢形土器である。細い半截竹管で自由な区画文を描き、内部は縄文が残る。暗褐色・厚さ7mm・焼成良好で、表面にススが付着する。

⑫ 7類 無文土器及び無文部の破片は約100点を数えるが、口縁部資料は僅か1点である。322は、口唇に刻目を持つ青灰色の精製土器で、厚さ5mm。胎土が精製されて厚みが7~8mmのよく磨かれた土器6点は、列孔浅鉢である可能性が高い。323は、擦痕調整のある鉢形土器(赤褐色)。324は指痕を残す薄手硬質土器(明褐色、底部?)。325は僅かに擦痕と1孔を見る(褐色)。

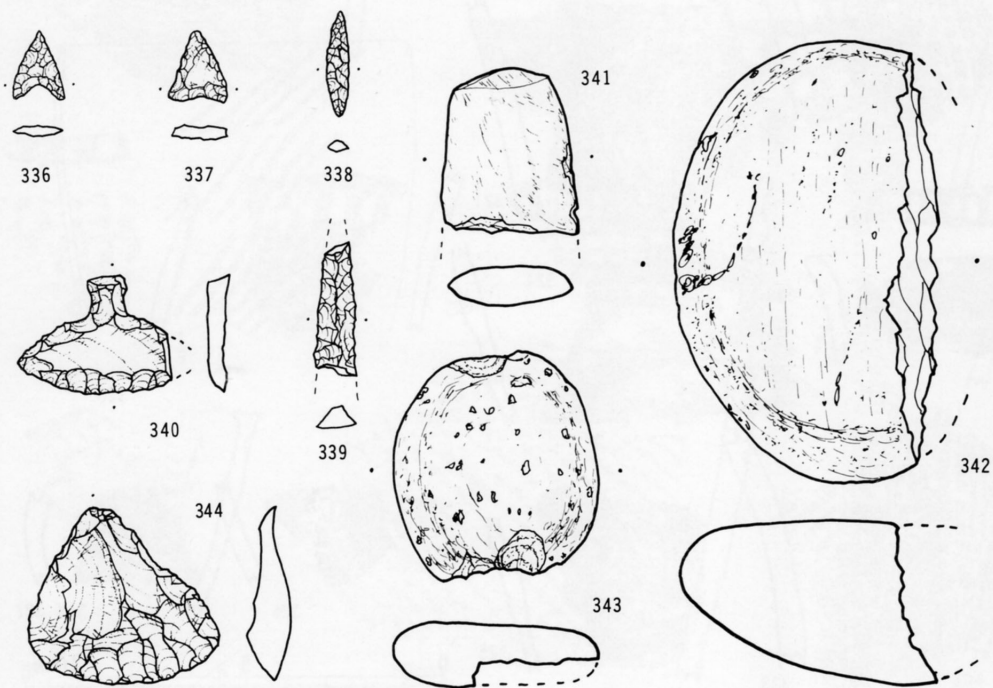
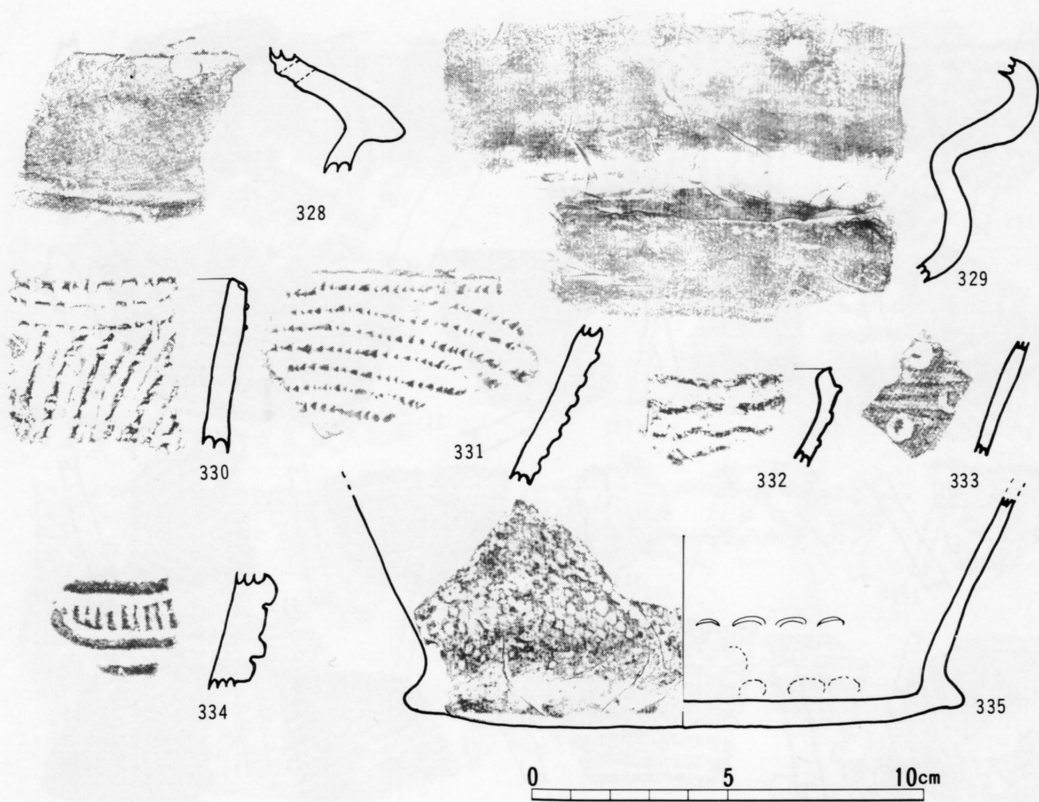
挿図20 第13号住居址の遺物 (1)



挿図21 第13号住居址の遺物 (2)



挿図22 第13号住居址の遺物 (3)



⑬ 8類 丹彩土器は3点で、2点が同一個体である。326は、側線入爪形文で幾何学的な文様を描き、下部は縄文となる。表面に赤色塗彩がある。327は、無文の表面に塗彩がある。いずれも胎土は精製されて焼成良好で、厚さ5～6mmである。

⑭ 9類 列孔浅鉢土器は2点で、いずれも無文。328は、口縁部が立ち上がる形である。表面は良く研磨され、暗褐色・焼成堅緻である。厚さ7mm。329は、赤褐色を呈する大型のもので、下部は2段ないし3段で構成される。表面はよく研磨され、厚さ9mm・焼成良好である。

⑮ 10類 ソーメン状の貼付文を持つ類で、4点ある。330は、凸帯上にへらによる刻目を有する。褐色・厚さ8mm・焼成普通で、裏面はよく磨かれ口唇は角ばる。331は、幾条もの貼付帯が竹管によって押しつけられる。褐色・厚さ8mm・焼成普通・砂粒を含む。332は、凸帯が波状となる。明褐色・厚さ5mm・焼成普通。

⑯ 11類 その他の土器として、333は、条痕地に竹管円文が施される、暗灰色の焼成堅緻な土器で、厚さ5mm。胎土・焼成とも1類に似る。1点のみ。334は北陸系中期土器（上山田式）で混入による所産と思われる。青灰色。厚さ11mm。

底部資料は14点を数える。底部が張り出すもの5点、そうでないもの7点で、不明2点。木の葉底が1点ある。335の資料は底部径13.5cmで縄文施文の深鉢土器である。

### 3. 石 器

石鏃8点(336, 337)。石錐2点(棒状両端尖338, 断面三角棒状錐339)。石匙は下呂石製横型1点(340)。磨製石斧2点(定角に近いが側縁が明確に面取りされないもの1点, 341)。乳棒状石斧と思われる破片1点。打製石斧1点(安山岩)。スリ石3点(砂岩・棒状2, 流紋岩・円形1・342)。凹石1点(砂岩)。石皿1点(砂岩, 表裏に使用面)。礫石錐1点(流紋岩, 343)。削器3点(344)。剥片4点。削片23点。石核1点。

## 第14節 土 壙 (SK)

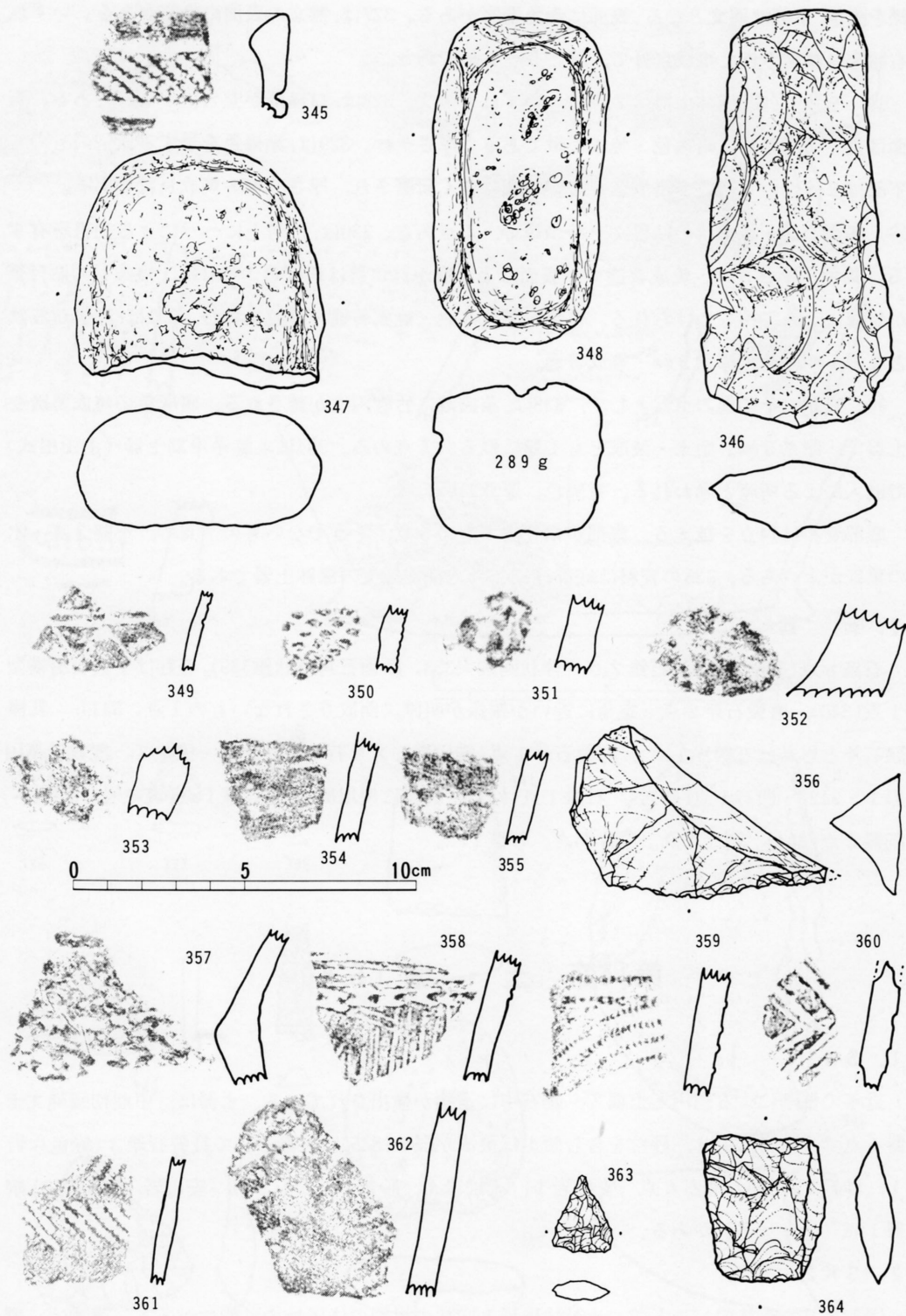
### 1. SK1

近年の掘削による長円形土壙で、集石中に遺物が検出されている。土器は、中期初頭縄文土器1点で、口唇は尖り、砂粒を含む胎土は焼成が弱い(345)。石器として打製石斧3(緑色片岩1, 砂岩2, 346), 磨石6点(安山岩1, 流紋岩4, 砂岩1), 凹石2点(安山岩, 347, 348), 削器1点(チャート)がある。

### 2. SK2

円形スリバチ状のピットで、4号住居址と同類の早期の住居址の可能性が有る。遺物は、覆

挿図23 第1～3号土壌の遺物





土上層より半截竹管沈線文土器1点(2群4類A, 349)下層より3×5mm粒の楕円押型文1点(350), 5×7mm粒1点(351), 菱形文破片4点(底部近くで厚さ21mm, 352, 353), 条痕文土器1点(354), 無文土器1点(355)がある。石器は打製石斧1(安山岩), 削器1(下呂石, 356), 剥片3等がある。

### 3. SK3

2個の円形ピットが重複するが, 時期差は特に認められない。遺物は, 繊維入竹管刺突文(粕畑式)1点(357)のほか, 前期末の諸磯C式土器10点(358, 359, 360, 361, 362), 磨石1点(流紋岩), 石鏃1点(下呂石, 363), 削器5点(364は, ピエス・エスキューカ?), 剥片10点がある。

### 4. SK4

4個のピットが重複し, 縄文早期と中期の遺物を見る。

高山寺式の押型文土器が3点ある。(365, 366, 367), 6~8mm粒の楕円文で, 裏面に斜めの太い沈刻が入る。色調は明褐色で, 胎土に砂粒を混じえ焼成はやや軟質である。含繊維貝殻条痕文土器が1点ある(368)。暗褐色・焼成普通・厚さ7mm。

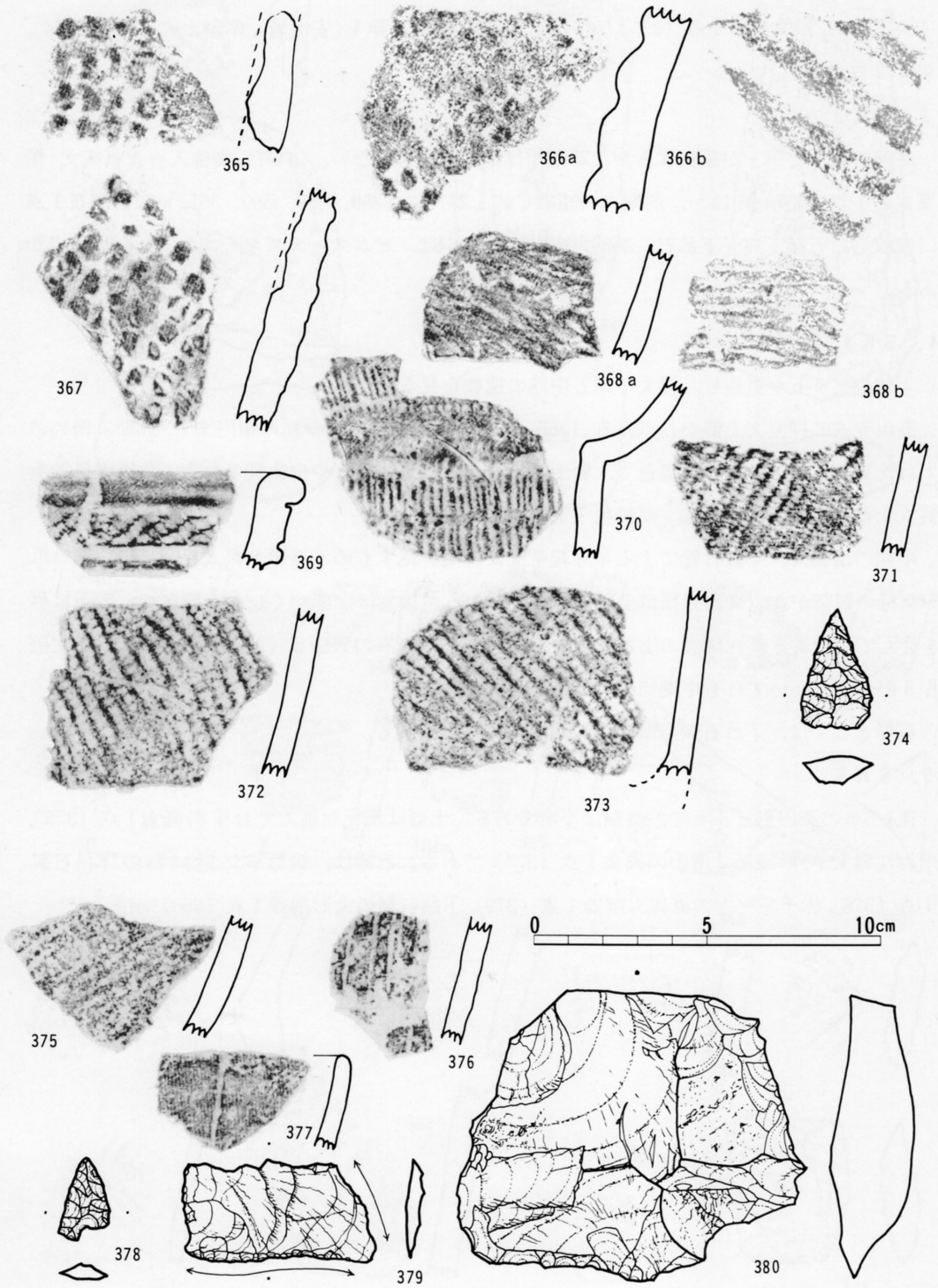
中期の遺物は, 半截竹管による半隆起帯間に縄文を施すもの(五領ヶ台式比定, 369), 細い爪形文様の刺突が並ぶ鷹島式類似土器(370)とがある。後者は頸部がくびれる甕形で, 胎土に砂を含んで粗であるが, 硬質の土器である。その他縄文のみの破片6(371, 372, 373)無文破片3があるが, いずれも中期初頭の所産と思われる。

石器としては, 下呂石製石鏃1点(374)。削片2点がある。

### 5. SK5

径1.5mの正円形ピットで, 時期は不明である。土器は風化が進んでおり斜縄文1点(375), 平行沈線文1点(376), 薄手の無文1点(377), である。石器は, 鍬形鏃に近い形の下呂石製1点(378), 赤チャートの直線刃削器1点(379), 下呂石製の大型削器1点(380)がある。

挿図24 第4, 5号土壌の遺物



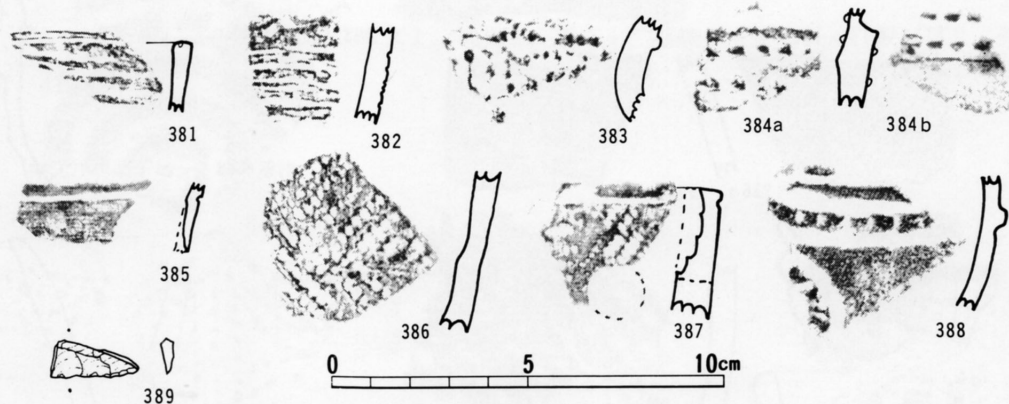
## 第15節 ピット群

### 1. 第1ピット群

10個の大小ピットの集合を第一ピット群と呼称した。住居址の可能性もある。遺物の遺存状態は悪く、風化の進んだ個体が多い。繊維入無文土器1点、半截竹管沈線文土器2点(381, 382), ソーメン状貼付文2点(383, 384), 丹彩土器1点(385), 縄文12点(386, 387), 隆起線文1(388), その他無文土器等10点で、前期末から中期前葉にかけてのものがほとんどである。

小形削器1点(389), 削片2点(いずれも下呂石製)がある。

挿図25 第1ピット群の遺物



### 2. 第2ピット群

第3号住居址の周辺に存在する14個のピット群である。各ピット内からは、次の様な遺物が出土している。

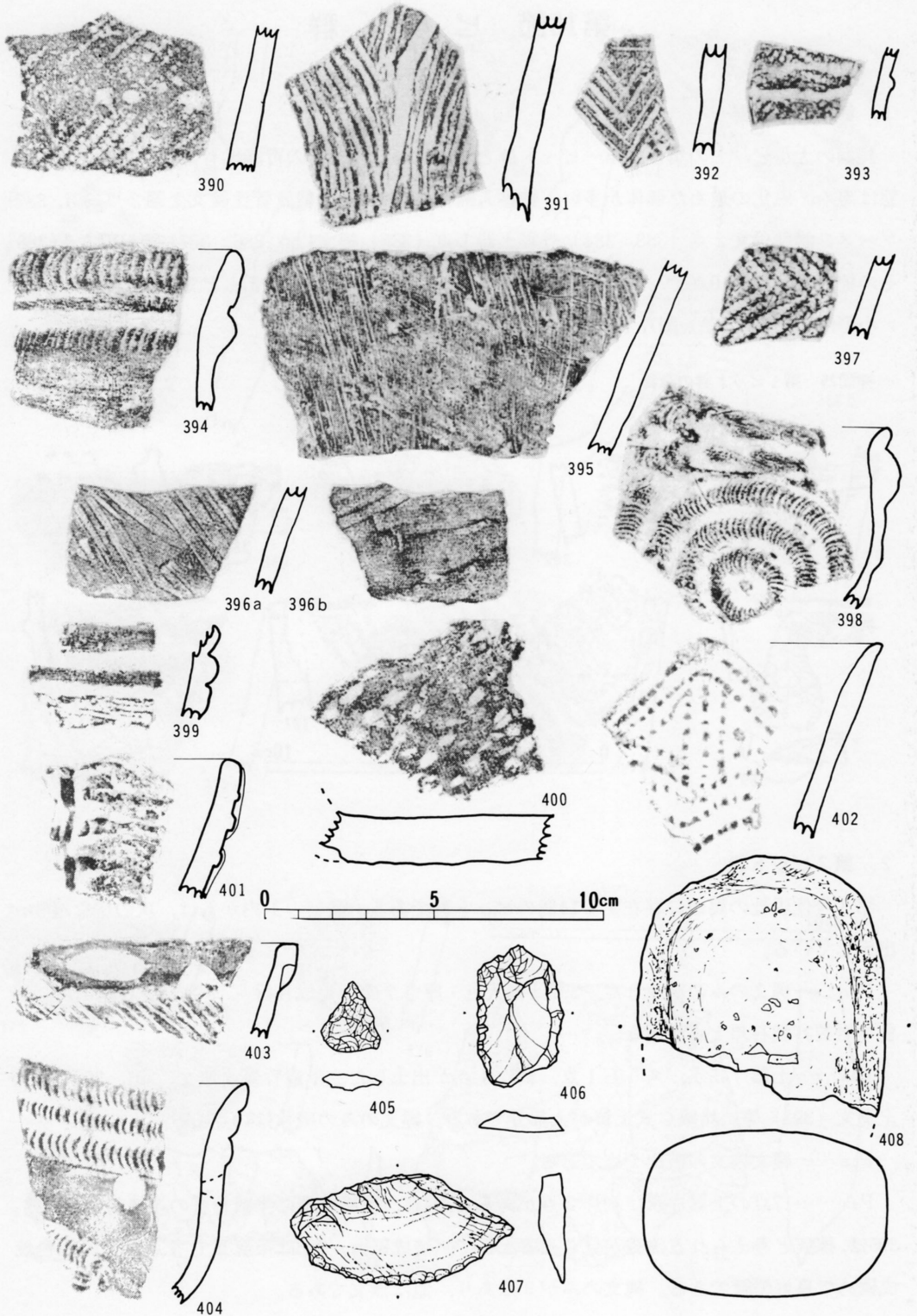
P<sub>10</sub>……縄文のみの破片3点。390は青灰色・厚さ7mm・焼成良好・下呂石製石鏃1点、緑色片岩製打製石斧1点がある。

P<sub>11</sub>……土器片45点、スリ石1点、剥片4点が出土した。半截竹管沈線文(391, 392), 突帯上縄文(393)等、諸磯C式土器が大部分である。縄文のみの破片は19点ある。

P<sub>12</sub>……縄文施文の破片1点である。

P<sub>14</sub>……17点の土器片及び剥片2点がある。394は、半隆起帯に半截竹管の連続刺突がある。395は、擦痕と考えられる沈線が見られる土器で、焼成堅緻。396は条痕文で5点あり、灰色焼成極めて良好堅緻である。縄文のみが3点あり、他は無文である。

挿図26 第2ピット群の遺物



P15 ……土器片12点, 石錐1点, 剥片2点で, 397は前期の羽状縄文。398は中期初頭の北陸系土器で, 同心円の半隆起帯に竹管文が連続刺突される。山形口縁で灰色・厚さ6mm・雲母を含み焼成良好。399は竹管沈線文, 400はその底部で, アンペラ様の圧痕が残る。他に縄文4, 沈線文1, 無文3がある。

P17 ……赤褐色の縄文土器片1点で, 厚さ8mm。

その他ピット外覆土中において, 土器片19点, 石鏃3点(405), 削器6点(406, 407), スリ石3点(408)が出土している。401, 402はソーメン状貼付文, 403は, 肥厚した口縁部に三角の陰刻を持つ沈線文で, いずれも十三菩提式に類似する。焼成良好。404は, 半截竹管による連続刺突文で波状口縁をなし, 穿孔がある。暗褐色で厚さ6mm・焼成良好。

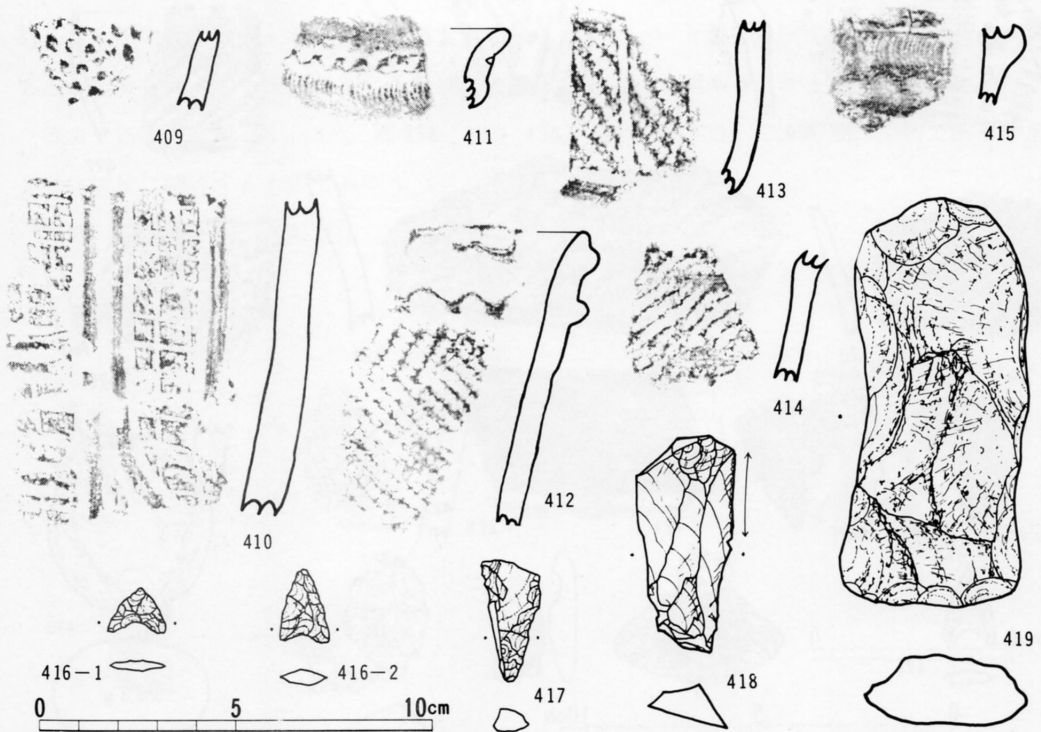
### 3. 第3ピット群

計14個の大小ピットの集合である。

P2 ……石鏃1(下呂石), 剥片4(下呂石3, チャート1, 418)が出土している。

P6 ……諸磯C式の半截竹管沈線文1, 縄文1, 無文1, 石鏃1(下呂石), 打製石斧2(砂岩, 419)。

挿図27 第3ピット群の遺物



P10 ……粒の細かい楕円押型文 (409) 1点。中期前葉の北陸系沈線文土器 (410), 爪形文土器 (411), スリ石 (砂岩), 黒曜石削片等が出土している。

P11 ……赤褐色の刺突文? 土器 1点である。

その他 P10 の周辺において, 十三菩提系の貼付文土器 (412), 縄文 (413, 414), 爪形文 (415), 及び石鏃 6点 (416-1.2), 石錐 1点 (417) 等が見られる。

## 第16節 大ピット

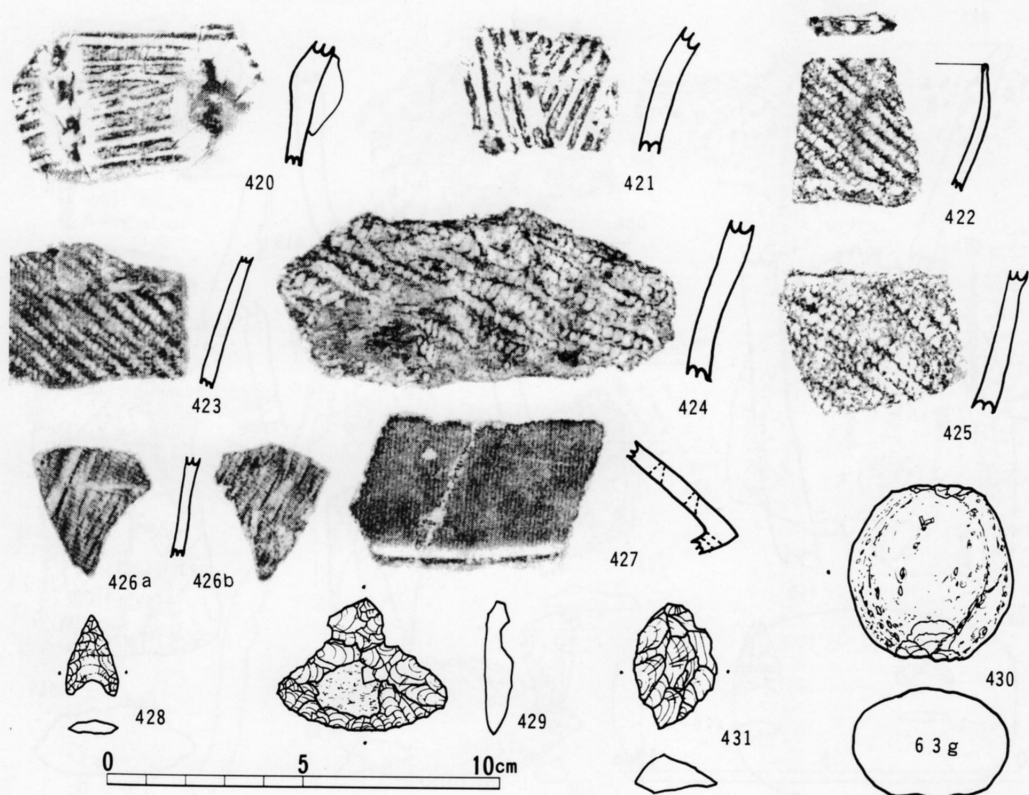
### 1. 大ピット

第9号住居址東方の双円形ピットで, 10~26cmと浅いが種々の前期の遺物を包含している。

#### 土 器 (第2群)

① 4類 半截竹管沈線文土器は11点で (420, 421), 420は突起がつき, 隆線には竹管刺突が入る。灰色・厚さ6mm・焼成普通。

挿図28 大ピットの遺物



② 5類 縄文施文の土器は30点で、黒褐色・厚さ4mmの焼成の良いものは2点(422, 423), 他は褐色・明褐色・焼成普通もしくはやや悪いもので厚さ5mmが6点, 6mmが9点, 7mmが10点, 8mmが3点である(424, 425)。

③ 7類 無文土器は15点で、426のみ表裏に条痕を残す。

④ 9類 列孔浅鉢土器と思われる破片が、同一個体5片ある。赤褐色・厚さ6mmで、胎土は精製され焼成は極めて良い。内外面とも研磨される。427は3孔が縦1列に並び、特殊な意図があったものと思われる。

## 石器

石鏃2点(下呂石, 428), 石匙1点(横型・黒曜石, 429), スリ石1点(流紋岩), 石錐1点(礫石錐, 安山岩, 430), 削器2点(下呂石1, 黒曜石1, 431), 剥片1点(下呂石)がある。

# 第17節 近世墓

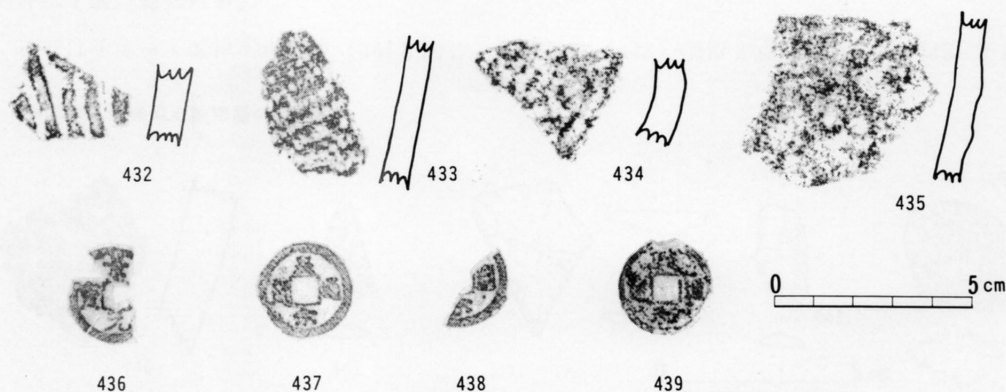
## 1. 第1号近世墓

第2号住居址の一部を切って掘り込まれた、方形のピットである。地表の集石から少し離れた部分に、7~35cmの自然礫が多数詰め込まれた状態で検出され、底部近くより銅銭4点、鉄釘2点、不明鉄器2点、木片4点、縄文土器片4点、チャート製フレーク1点、下呂石チップ2点が出土した。また礫の間より、素焼の土器片(骨壺)1個体6点がまとまって出土した。

縄文土器……沈線文1(432)。縄文2(433, 434)。無文1(435)で、時期は不明であるが第2号住居址に関連するものであろう。

古銭 景德元寶 (宋真宗 大中景德元年 1008年) 1点(436)

挿図29 近世墓の遺物



皇宋通寶	(宋仁宗 寶元2年	1039年)	2点 (437, 438)
政和通寶	(宋徽宗 政和元年	1111年)	1点 (439)

## 第18節 集石遺構

長方形にチャート角礫約20個が集積する。遺物は繊維入無文土器1点のみである。暗褐色・厚さ12mmで、多量の石英砂を含み焼成は悪い。



## 第3章 北東地点出土遺物

遺跡の立地する丘陵北東部の斜面において遺物の集積が見られ、第8層（深さ1.6m）まで分けることが出来た。この内Ⅰ～Ⅲ層は後世の耕作面積拡張のための埋立てによる所産と判明し、Ⅳ層・Ⅴ層・Ⅵ層は自然の流れ込みによる堆積で、遺物の攪乱混入が認められる。Ⅵ層は飛驒初見の赤ホヤ火山灰層と判明し、少量の遺物及び集石が検出された。Ⅶ層にも遺物を見るが、Ⅷ層は基盤の黄褐色ローム層となる。

この結果、遺物の安定するのは第Ⅵ層とⅦ層のみであり、Ⅴ層以上は何がしかの攪乱が認められることになる。

北東地点における出土遺物は約5000点にのぼり、その大部分がⅢ～Ⅴ層に包含されるが、層位的な分類は無意味であり、型式学的な分析を待つ外はない。整理にはなお時間を要するためここではⅥ層の赤ホヤ層を中心にその上下のⅤ層・Ⅶ層についてのみ検討を加えておきたい。

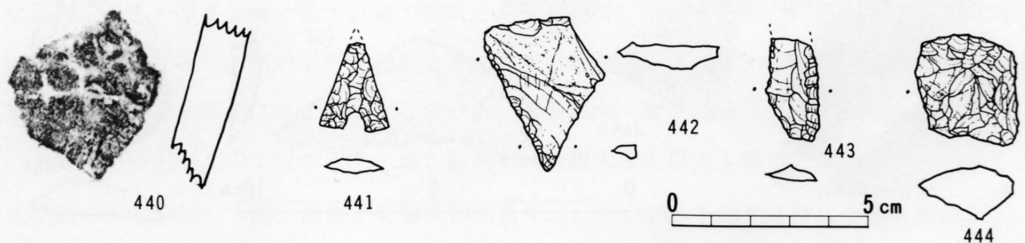
### 第1節 第Ⅶ層

Ⅶ層は基盤のⅧ層黄褐色ローム層上に、厚さ10～15cmで皿状に堆積するローム粒混入明褐色粘質土層で、黒褐色粘質土ブロックを挟んでいる。何ら遺構もピットも検出されなかったが、遺物は少量見られる。

土器は、楕円押型文1点のみである。440は褐色・厚さ12mm、少量の石英砂を含むが焼成極めて良く堅緻である。楕円粒は6×9mm大で、施文は浅く無文部を持つ。同一個体と思われる破片はⅤ層に見られる。

石器はチャート製鋏形鏃1点（441）、同じく石錐1点（442）、削器2点（チャート、443、下呂

挿図30 北東地点第Ⅶ層の遺物

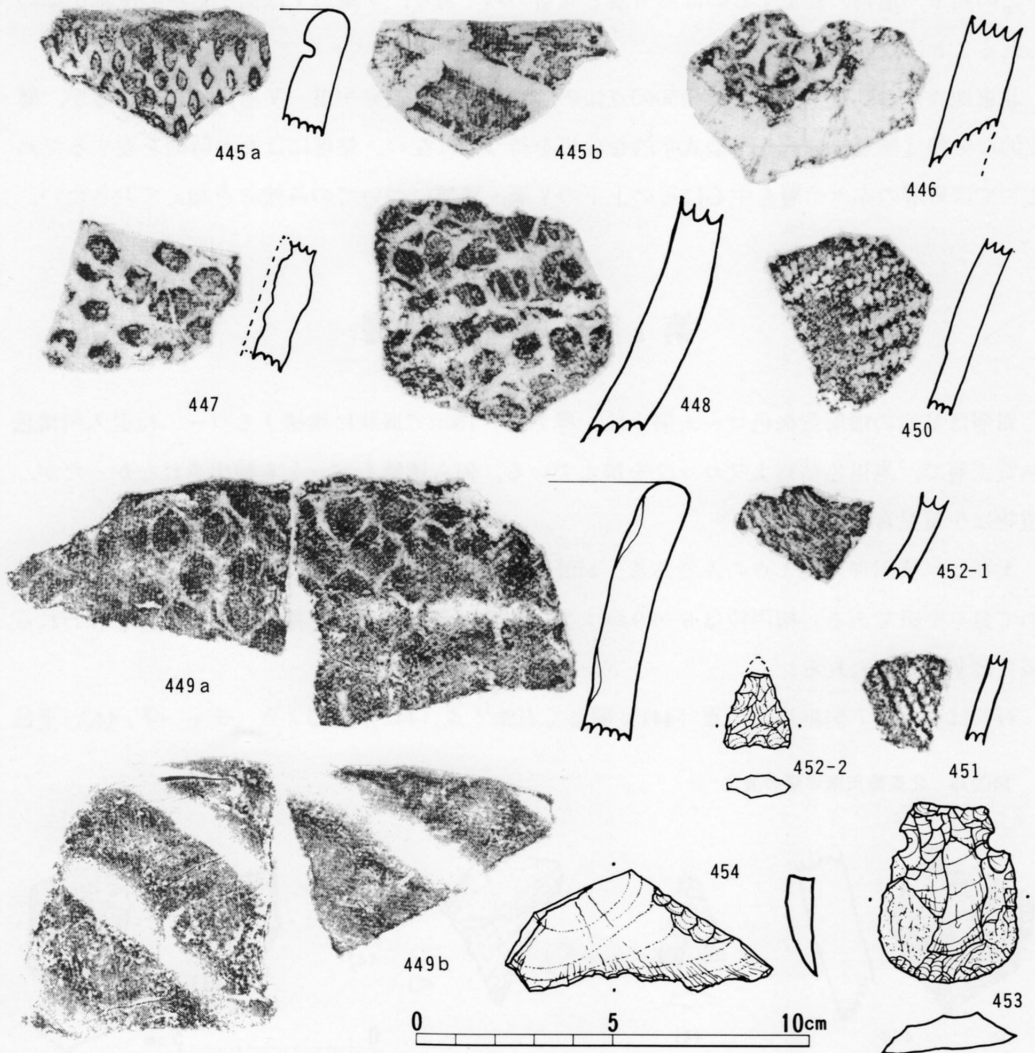


石), 下呂石製ピエス・エスキューユ 1 点 (444), 剥片 5 点 (下呂石) である。

## 第 2 節 第 VI 層

VI 層は, 鬼界カルデラから噴出した広域火山灰である, 赤ホヤ火山灰層で, 鮮やかなオレンジ色を呈する。最深部では現地表から 1.4m の深さに厚さ 15cm で堆積し, 傾斜面に沿って北方へ広がっている。南部端は, K・17区中央あたりの深さ 90cm の地点で消失する。

挿図31 北東地点第VI層の遺物



遺構としては、この層にくい込む形で集石が1ヶ所検出された。110×80cmの範囲に約60個のチャートを主体とする角礫が集積し、楕円押型文3点を伴っている。炭片は検出されていない。集石は層の傾斜に平行する。

遺物は土器片8点、石器類4点である。

土器は、まず楕円押型文として、445は粒の細かく長いもので、暗褐色・厚さ10mm、砂粒を含み焼成はあまり良くない。施文は口唇から縦になされ、裏面には斜めの深い沈線が加えられる。446、447、448は集石内出土で、粒の大きさは平均7×9mm、赤褐色で繊維と石英砂を含み厚さ13mm、焼成は普通である。449は菱形文に近い粗大楕円文で、施文は浅く粒は12×12mmである。口縁は僅かに波状となり、裏面には浅い沈線が広く長く斜行する。V層の出土品と接合している。表面黒褐色・裏面赤褐色で、石英砂を多く含み厚さ11mm、焼成は良い。

縄文施文が2点ある。450、451は施文の向きを異にするが、明褐色・厚さ6mmで焼成普通。内面にススが付着する。

452-1は、わずかに擦痕が見られる。底部に近く、尖底になると思われる。明褐色・厚さ8mm・焼成普通。

石器は下呂石製三角鏃1点(452-2) チャート製縦型石匙1点(453) 下呂石製削器1点(454) スリ石2点(円形及び特殊スリ石。いずれも流紋岩)である。

### 第3節 第V'層

赤ホヤ火山灰層直上の層で、20~25cmの厚みを持ち褐色の粘質土層である。V層とは僅かに黒味を帯びる点で区分される。遺物は早期・前期のものと、少量の中期土器が混在する。遺構の検出はなく、二次堆積による所産と考えられる。

#### 1. 第1群の土器

1類Aa……山形押型文土器で、1個体の約2/3と別個体の2点がある。455は口径42cm、推定高45cmの尖底深鉢で、1単位7列の山形文が縦位施文される。口唇は角張り、口唇上にも山形と刻目(内側)が入る。裏面の山形文は、1単位のみ横位に施文される。胴部半ばより無文となる。茶褐色・厚さ8mm、胎土良質で堅緻である。456は前資料と同一の色調・胎土を持つが、山形文に変化があり、枳形平行四辺形文を加えている。原体巾は4.5cmで、端部を切截して波長を違えることなく縦位にうまく施文している。厚さ11mm・焼成堅緻

1類Ab……山形文の1辺が3cmを越し最長4cmの粗大な山形文土器で、褐色・厚さ7mm・焼成堅緻である(457)。同一個体がV層に10片あり、口径が40cmを越す深鉢になると思われる。

1 単位 5 列の山形が縦位施文され、口唇は角張り内側に刻目が入る。底部は角度 $115^{\circ}$ の鈍い尖底でⅥ層から出土している。

1 類 Ba……楕円押型文の粒が $5 \times 7$  mm程度のものが 5 点ある。繊維及び石英砂を含み、厚さ 15mm・赤褐色・焼成良好 (458)。

1 類 Bb……楕円押型文の粒が10mmを越す大粒のもので、施文は浅い。黒褐色と赤褐色があり、いずれも繊維を含む。459は口縁部で、裏面には斜めの沈線が入る。460は胴下半部で、焼成普通・厚さ14mm。

1 類 C……菱形回転押型文で、461は一辺 2 cmの菱形が縦位に施文される。口縁は波状を呈し、波の低い部分からそのまま裏面へ斜めの沈線となって下降する。推定口径36cmの大型鉢で、厚みを考慮するとかなりの重量であろう。褐色で胎土に白色の大きな砂粒を含み、繊維も僅かに見られる。厚さ14mm・焼成良好。462, 463は別個体で、胎土は前者が赤褐色、後者が黒色・厚さ13mm、砂粒を含むが焼成堅緻である。

1 類 E……突帯を伴う押型文で、464は口縁部破片である。刻目の入る突帯の上下に、山形の陰刻が並ぶ。口唇裏側にも、斜めの線刻が入る。褐色・厚さ13mm・焼成は弱く軟質である。繊維も少量含む。もう一種は突帯上に爪形文が入り、山型押型文が表裏に施される。灰褐色で極めて粗質である。厚さ 9 mm。

1 類 F……半回転手法による、ネガティブな山形文土器である (465)。1 類 A の455の土器と重なる様にして、半個体分が出土した。器形復元図によると、口径は36cmとなる。口縁下 7 cm は、そろばん玉 2 個を接合させた形の原体を、半回転ずつ 8 列に向きを交互に変えて施文し、胴中央部からは全回転と半回転を綾杉状に組み合わせている。口唇にも別原体の刺突がある。胴下半部は無文化する。暗褐色・厚さ 8 mm・繊維を含み粗質である。466も、同類のものと思われるが赤褐色を呈する。

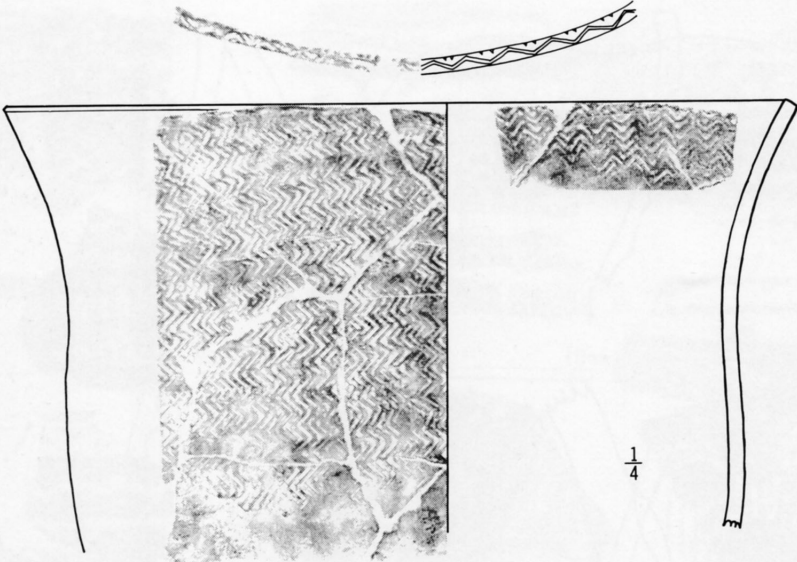
その他特殊な押型文として 467は半截竹管文を伴う柵形平行四辺形押型文破片 (Ⅳ層の同一個体より判定)、468も回転による施文である。

3 類 A……貝殻による条痕文が表裏に残る。469は黒褐色で厚さ 8 mm、胎土は精製されて焼成堅緻である。

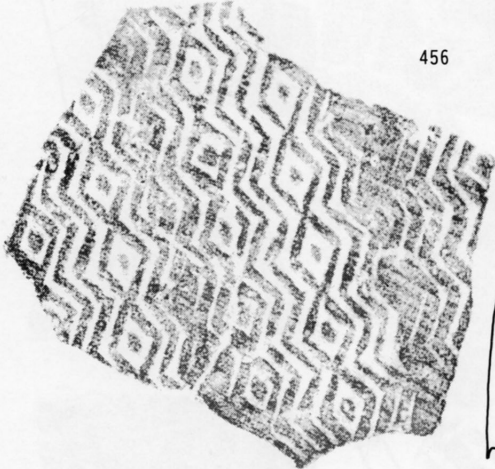
4 類 B……貝殻縁による刺突文土器である。2 個体 7 片で、明褐色と赤褐色がある。470は、口縁部で、口唇内側にも同様の刺突がある。471は区画沈線、472は本類特有の山形沈線が見られ、貝殻原体の中は 8 ~ 9 mmである。いずれも焼成は普通ないし、やや軟質で、細かい砂粒を含む。厚さ 8 mm。

6 類……繊維入爪形刺突文土器が 2 点ある。灰褐色・厚さ 7 mm。

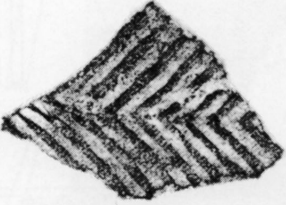
挿図32 北東地点第V層の遺物 (1)



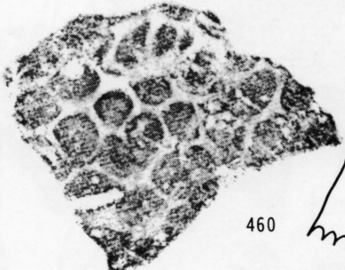
455



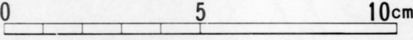
456



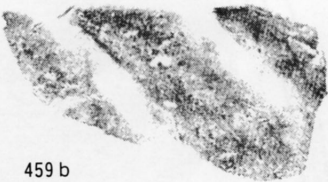
457



460



459a

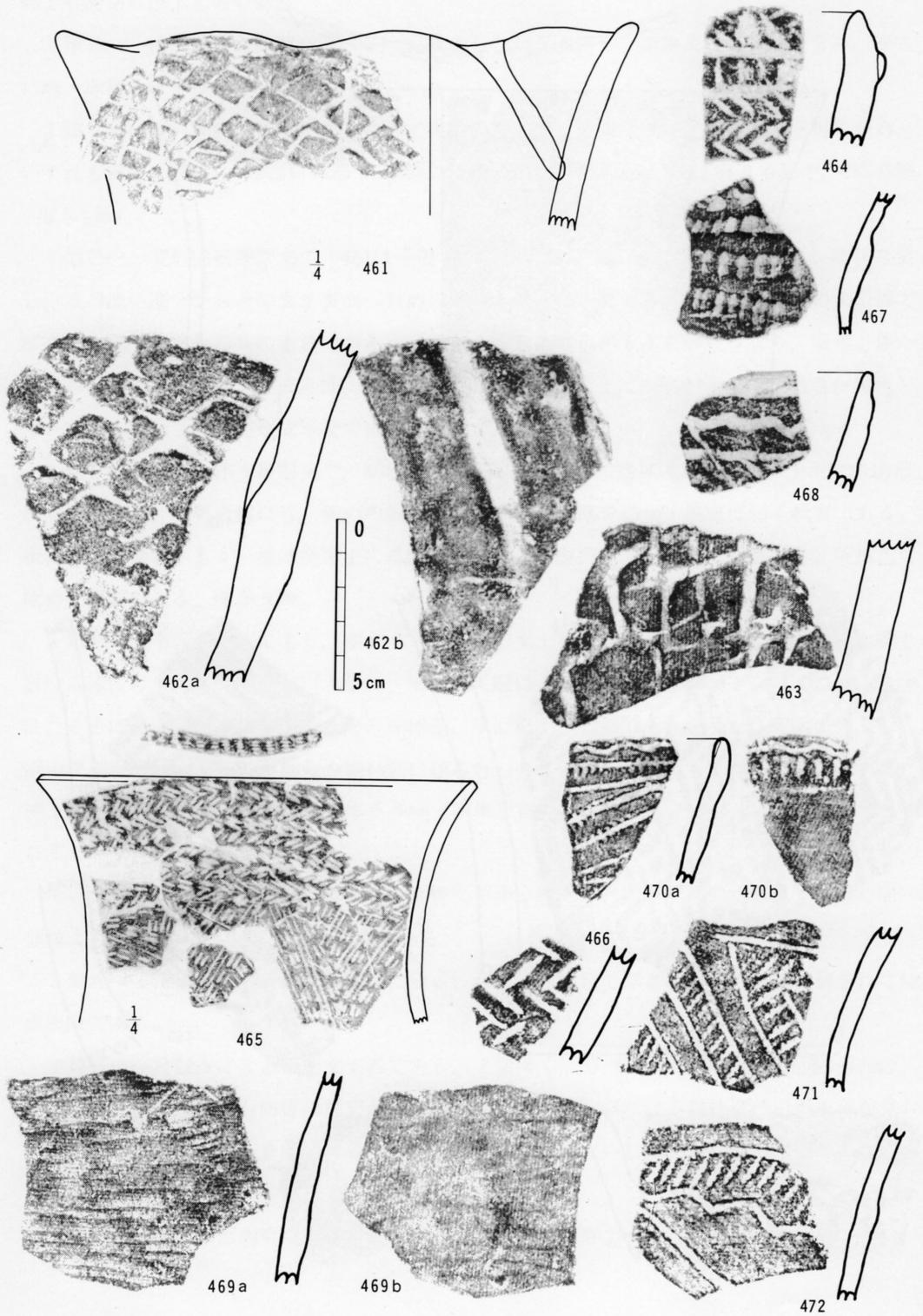


459b

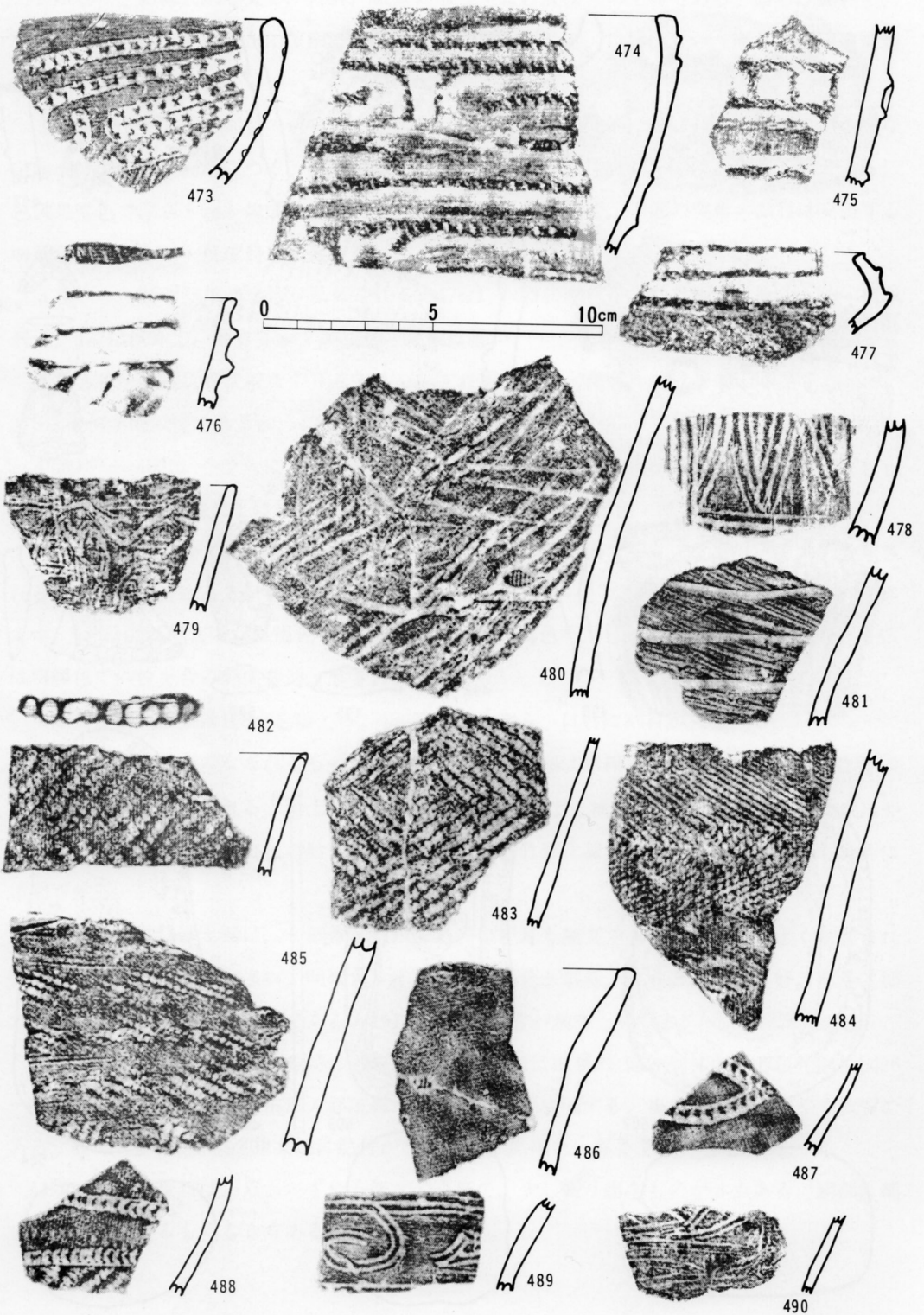


458

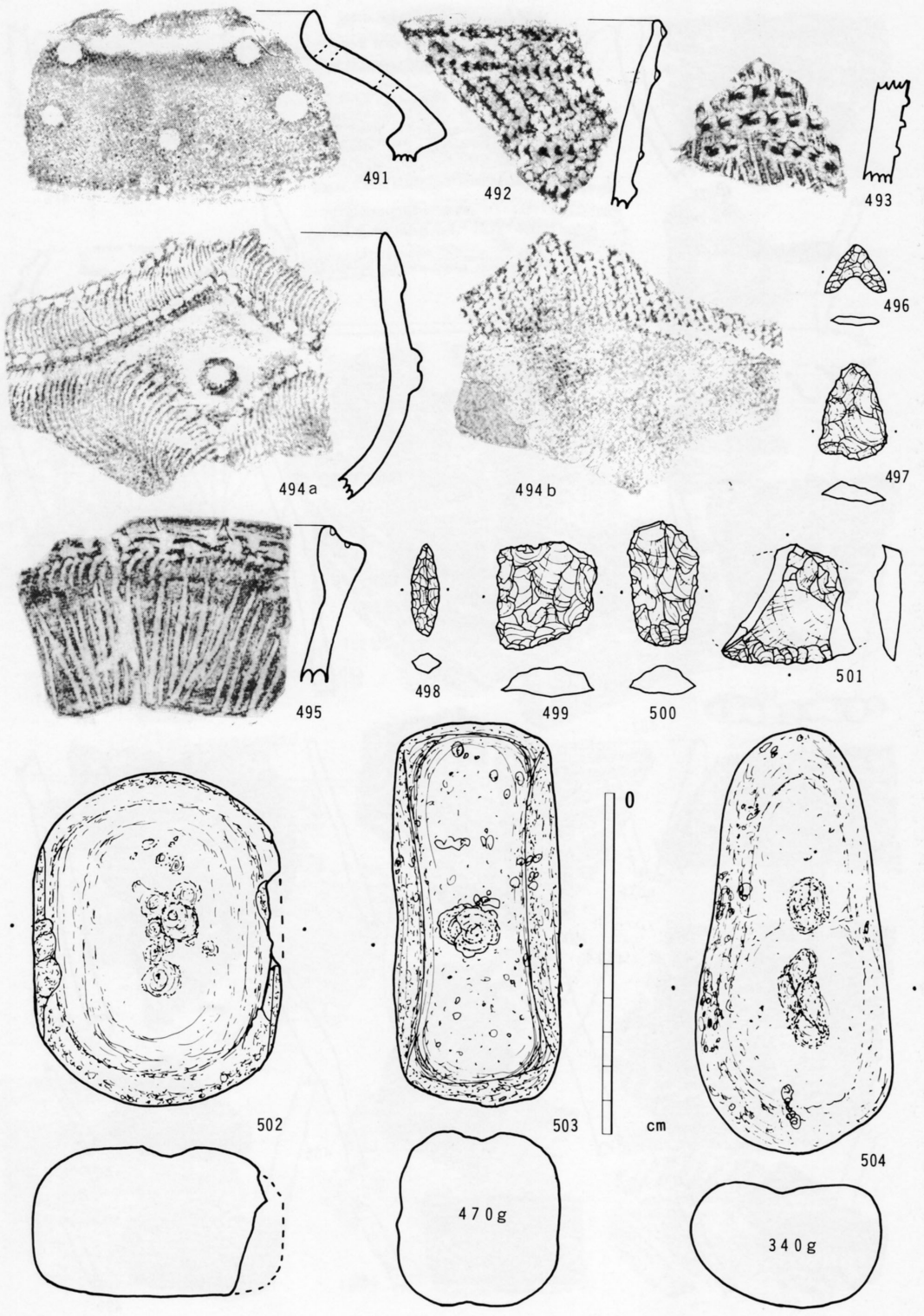
挿図33 北東地点第V層の遺物 (2)



挿図34 北東地点第V層の遺物 (3)



挿図35 北東地点第V層の遺物 (4)





## 2. 第2群の土器

2類C……側線入爪形文で、473は微量の繊維を含む灰褐色の土器である。器形は鉢形で、平行線内を爪形文で充填し、下部は単節の縄文が施文される。口唇は丸い。厚さ8mm・焼成良好。

3類A……突帯上に刻目の入る類で、474は平行突帯が部分的に結ばれる。口唇には小さな突起が2個ずつ8箇所につく。同一個体がⅢ層に多くあり、挿図36-④は器形復元図である。色調黒褐色で厚さ5mm・焼成普通である。475は梯子状突帯で、下部の突帯の刻目は交差する。明褐色・厚さ6mm・焼成良好。他1点。

3類C……断面三角の突帯が貼付られる。476は、口唇に刻目が入り、灰色・厚さ5mm・焼成普通。477は浅鉢で、厚さ4mm・黒褐色・焼成は悪い。

4類A……半截竹管沈線文で6点あり、いずれも暗褐色・褐色・焼成普通・厚さ6～8mm。478は幾何学的紋様であるが、479の紋様は不定である。

4類B……480はヘラ先による斜沈線が交差する。明褐色・大きな砂粒を含み粗製・厚さ6mm。481は細い条痕地文上に平行沈線が横位に引かれている。褐色・厚さ6mm・焼成は良い。

5類……縄文の施文されるものは134点あるが、なお未整理である。北白川下層式に分類されるものが一割程度ある。482は口唇に刻目が入り、スレートの様な灰色の胎土である。厚さ4mm。483は羽状縄文で、黒褐色・厚さ4mm。484は赤褐色を呈し、厚さ7mm・焼成良好。485は明褐色で砂粒を含み焼成普通。厚さ11mm。

7類……無文土器は108点を数える。486は繊維を含み、口唇に刻目が入る。

8類……赤色塗彩のなされるものは4片あり、487、488は側線入爪形文、489は、半截竹管による幾何学文が施文される。胎土は白色に近い明褐色で、よく精製され厚さ5～6mm、焼成はやや軟質である。490は赤褐色の胎土で厚さ4mm、半截竹管沈線文が施される。いずれも表面に塗彩される。

9類……列孔浅鉢土器は、7個体8点がある。いずれも無文であるが、胎土はよく精製され表面は研磨されるものが多い。明褐色・赤褐色・黒褐色がある。焼成は概して良好。厚さは部分的に肥厚するが、6～9mmである。491は、孔の位置が通常と異なる。

10類……ソーメン状の貼付を持つものは6点で、492はⅢ層の同一個体の器形復元図挿図36-⑤に見る様に、縄文地に爪形入浮流線が幾何学図形を展開する。褐色・厚さ7mmやや軟質である。493の他3点は、沈線文地に貼付がなされる。黒褐色・厚さ7mm・焼成普通。

11類……底部資料は18点。いずれも無文の平底で、少し張り出すものが3点ある。胴部に縄文施文の判明するものも3点ある。

### 3. 第3群の土器

中期の土器としては、4点2個体が判明している。

494は細長い爪形文と点列文の波状口縁土器で、鷹島式比定である。挿図36-⑥の様に、上胴部が張り出す。裏面に撚糸文が施文されるが、段の形成はない。地肌は梨子地の様にザラつき、焼成やや弱く厚さ6mmである。把手の部分の破片も1点である。

495は沈線文浅鉢土器で、口縁部の文様は五領ケ台式に見られる刺突による波状効果文である。胎土は精製され、雲母を多く含んで金色にキラキラ光る。焼成良好・厚さ9mm。

### 4. V層の石器

石鏃7点、石錐1点、打製石斧1点、スリ石5点、凹石4点、削器12点、その他剥片18点、石核1点、剥片74点がある。

石鏃は三角鏃4(497)、長脚凹基鏃1(496)、不明2で、いずれも下呂石製。石錐は、チャート製棒状錐(498)。打製石斧は、安山岩製の半欠品。スリ石はいずれも円形に近く、砂岩3、流紋岩2である。凹石は安山岩2(503)、砂岩1(502)、流紋岩1(504)で、502は6面に面取りがなされる。501はスリ石兼用。火熱を受けている。削器はいずれも剥片利用の不定形削器で、両刃3(499・500)、片刃9(501)、石材は下呂石8、チャート3、頁岩1である。



第5表 石鏃分類表

(1) 石質別

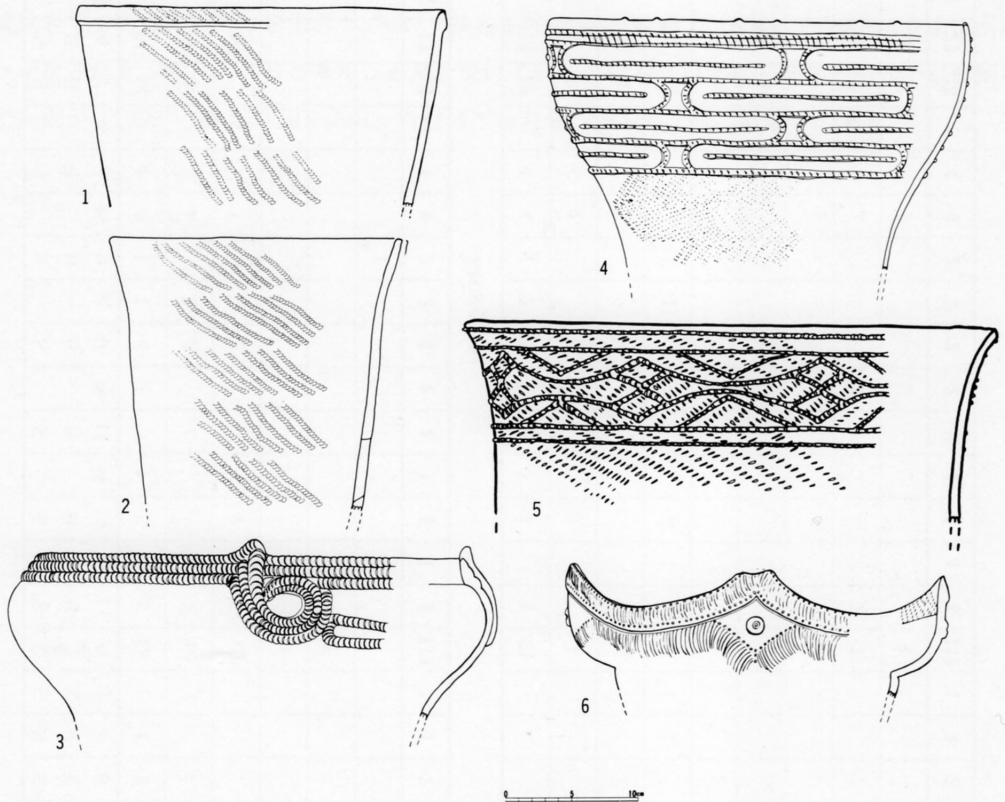
	向畑	%	糠塚
下呂石	267	73.7	74
チャート	49	13.5	13
黒曜石	39	10.9	7
頁岩	5	1.4	3
玉随	2	0.5	3
計	362	100.0	* 100

(※ %も兼用)

(2) 形態別

	向畑	%	糠塚	%	
凹基鏃	凹基	197	60.4	60	63.8
	長脚	18	5.6	6	6.4
	鍬形	8	2.5	4	4.3
三角鏃	92	28.2	20	21.3	
有茎鏃	1	0.3	2	2.1	
柳葉鏃	尖基	6	1.8	0	0.0
	円基	4	1.2	2	2.1
計	326	100.0	94	100.0	

挿図36 器形復元図



## 第4章 出土遺物の概要と考察

本遺跡から出土した遺物は、約9300点の多きに達する。しかしその約3分の2が北東地点と命名した区域の二次堆積層より出土しており遺構・層位の認識を伴わない攪乱遺物として、残る型式学的な検討を待つよりない点は既に本文中で述べた。ただ、下層にゆくに従って、確実に早期の遺物が増加し中期が僅かとなる現象は、単なる攪乱と見るわけにも行かない。赤ホヤ火山灰層の堆積経過ともからんで、北東地点における遺物の堆積、あるいは投棄の問題を慎重に検討する必要がある。各遺構と直接関係のある遺物が検出されている事も、期待の残る部分であり、今後の研究課題である。

本章では、第1号住居址から第13号住居址までの13基の住居址と、5基の土壇、3箇所のピット群、集石遺構、墓壇、及び北東地点Ⅵ層・Ⅶ層（参考としてⅤ層）の遺物について、その概要を時代を追ってまとめてみたいと考える。

まず最も古い部分として、第4号住居址・2号土壇の各種押型文がある。楕円文は粒の大小はあるものの高山寺式特有の裏面の斜沈線を伴い、大きな時間差はない。ただし、粒の細かいものの沈線が、より深い傾向はうかがえる。次いで菱形の粗大な押型文が存在し、やはり裏面の斜めの沈線を伴う。<sup>(註1)</sup><sup>(註2)</sup>上原遺跡や破入遺跡と共通した、高山寺タイプ後出のものであろう。これに、撚糸原体による同様効果の菱形文が少量見られるのも、興味深い。北東地点では、B.P. 6400年の赤ホヤ火山灰層、及びその直下層にこれらと共通の遺物を見る。

貝殻沈線文土器は、田戸上層式に並行するものとして根方岩陰遺跡下層b類にも見る事が出来る。<sup>(註3)</sup>条痕文土器とともに高山寺式に共存するものであろう。

北東地点赤ホヤ直上層（Ⅴ層）では、粗大山形文・凸帯付山形文（相木式）等、種々の押型文最終末段階遺物を見る。半回転施文のネガティブな山形文（繊維入）が共出している点は、興味ある事実であるが、攪乱層である点に問題がある。

早期末では、6号住居址等にハツ崎貝塚最下層や粕畑貝塚などに見られる含繊維貝殻条痕文土器がある。直立不可能な小さな底部を持つ。木島式に対比されるオセンベ土器は極く微量、4号住居址の遺物中に見る。

前期は、5号・6号・7号・13号住居址などに、北白川下層Ⅱa式～Ⅱc式、諸磯a式～c式等の種々のものを見る。概観では、北白川下層式はⅡb式が最有力で、諸磯式はc式へと漸増がうかがえる。列孔浅鉢は無文が多く、諸磯b後半期の所産であらう。いわゆる中間タイプと

呼ばれる地方色のある縄文施文土器片は、各住居址内出土土器片の半数近くを占め、その扱いに苦慮するが、色調と厚さによる分類によって、傾向を比率化するとどめた。上記4基の住居址のうち13号は比較的早く、北白川下層Ⅰ～Ⅱb式期に、6号は、いわゆる特殊凸帯文土器が伴い、前期最末に位置付けられる。

この様にして、前期末～中期初頭は諸磯C式に引き続く十三菩提式土器と、北裏遺跡第四群<sup>(註4)</sup>対比土器が主体となる中に、客体として鍋屋町Ⅱ式、里木Ⅰ式等を見ることが出来る。

一方、2号住居址に見る前期最末の九合第5群C類対比土器や、北陸系の木目状燃糸文の組み合わせは、やがて10号・12号住居址に至って新崎式土器主体を明確にし、さらに1号住居址の鷹島式・船元式の瀬戸内系土器を加えて複雑さを増してゆく。北東地点のⅤ層より上部はこの時期、九兵衛尾根Ⅰ式～藤内式の信州系中期前葉土器、北陸系上山田式土器などの好資料を出土している。その原位置としての該当住居址が問題となろう。

中期中葉は船元Ⅱ式が8号住居址において極く一部を占めるにとどまり、井戸尻式が主体となる。これより信州系土器の台頭が著しく、やがて曾利Ⅰ～Ⅲ式一色となる中期後葉の状況は、北東地点の遺物群の傾向で伺うことが出来るが、該当遺構は不明である。

これ以降、後期・晩期の縄文土器資料は皆無に等しい。弥生後期に至って、ようやく9号住居址の欠山期土器セットを見る。信州箱清水式の強い要素が見られ、再び信州との深いかかわりを伺うことが出来よう。

石器については代表的なもののみ図示し、他は表で示すとどめた。石鏃363点はその大部分が縄文前期に属するものであり、狩猟活動の隆盛を彷彿とさせるものがある。石匙や各種削器の出土量も需要を反映したものであろう。

磨製石鏃(粘板岩)1点を除く、362点に関する石鏃石質の分類表が第4表(1)5表(1)である。下呂石が7割強を占め、極めて多い。次いでチャート・黒曜石が約1割台で続く傾向は、糠塚遺跡の場合と同様である。

次に磨製石鏃・石鏃未製品・形状不明品を除く、326点の石鏃の形状に関する分類表が第4表(2)・5表(2)である。凹基鏃が6割を占めるが、種々のバリエーションがあり、長身のもの、五角形を呈するもの等細分は可能である。三角鏃の多い点が注意をひく。早期に伴うものとして、鏃形鏃の他にこれらの三角鏃の一部が考えられる。形の整ったもの、脚の長いもの等いわゆる美しい石鏃は、前期に多く属する様である。長身化した三角凹基鏃は、中期の傾向が強い。有茎鏃がただ1点あるが、典型的なものではない。従って、ほとんど皆無と言って良い。

石匙は32点出土しているが、北白川下層式に特徴的な、肩の張ったシンメトリカルなものは見られない。北東地点Ⅵ層赤ホヤ火山灰層中出土のチャート製縦型石匙は、ひもかけ用の挟りを備えた初源的なものであろう。石錐の多い点も注目に値する。棒状とつまみ付の2種類が、

同率で出土している。

磨製石斧は、中期に伴うものが多い。打製石斧も同様である。スリ石は早期押型文期の流紋岩製特殊スリ石、前期の安山岩製面取りスリ石（凹石兼用が多い）などの特殊なものがあるが、大部分は、砂岩・流紋岩の円礫を使用したものである。凹石の、計40点は決して多くはない。北東地点出土が半数以上を占めるため、時期を限定することが出来ないでいる。これは、他の石器も同様である。

石皿はSB07に全形を伺えるものが1点あるのみで、いずれも小破片である。

石錘はほとんど打欠による礫石錘であり、集中出土はない。用途を漁網用・編物用以外に求める心要があるかも知れない。

削器の出土は非常に多く、石鎌に次ぐ210点を数える。いわゆる不定形スクレパーであり、縄文各期に見られるが、チャート製片刃のものは特に早期の所産であることが多い。

装飾品として珧状耳飾が4点あるが、共存土器は限定出来なかった。

石材については、安山岩・流紋岩等の自然礫は地元で豊富に入手することが出来る。貝殻状断口を有する石材に関しては、やはり下呂石が圧倒的であり、これも原産地に近い事が要因であろう。黒曜石については、中期末の玄武岩系の粗製石匙とともに、<sup>(註5)</sup>信州との直接の関連を示す資料である。

以上、本遺跡から出土した遺物の概要を述べてきたが、再三触れる様に、北東地点での多量の遺物の集積状況は、遺物の何らかの営力による二次的活動が為された結果であり、従って住居址において検出される遺物量を減少させていることは確かである。

このことは各住居址における各形式土器の比率関係についても影響を及ぼしている事は疑いなく、理想的な形での住居址検出に至らなかった事は残念である。

しかし、にも増して本遺跡が、例えば早期の種々の押型文資料や、前期末から中期への過渡期資料を提供するなど、特筆すべき点は多くあり、尚後の飛驒地方における考古学研究に、一つの指標を与えることとなろう。

(註1) 「上原遺跡」1974及び「金屋・星の宮遺跡」1975 坂下町教育委員会

(註2) 「破入遺跡」 勝山市教育委員会 1977

(註3) 「岐阜県根方岩陰」 日本の洞穴遺跡 日本考古学協会、洞穴遺跡調査特別委員会 1967

(註4) 「北裏遺跡」 可児町北裏遺跡調査団 1973

(註5) 増子康真氏の御教示による。

向畑遺跡の遺物

昭和59年3月 発行

編集 高山市教育委員会

発行 高山市教育委員会

印刷 大進社  
高山市有楽町40番地